平成 26 年度（第 58 回）
岩手県教育研究発表会発表資料

復興教育分科会

つづける　つなげる　つたえる

～ボランティア活動を通じて自ら考え復興に携わろうとする気持ちを涵養する～

平成 27 年 2 月 12 日
岩手県高等学校長協会
岩手県立盛岡南高等学校

Ⅰ　研究のねらい

Ⅱ　研究内容と方法
　1　研究の目標
　2　研究の内容と方法（指導計画）

Ⅲ　学習の展開と考察
　1　ボランティア活動【いきる】【かかわる】
　(1)　現地を知る、地震について知る
　　①　講演会
　　②　復興教育ガイダンス
　　③　コラムノート
　　④　グループワーク
　　⑤　修学旅行
　(2)　ボランティア活動の実際
　　①　ボランティア活動の実現まで
　　②　2013年6月　　２学年ボランティア（陸前高田市、釜石市、山田町）
　　③　2013年夏休み　２学年有志ボランティア（陸前高田市、盛岡市）
　　④　2014年6月　　２、３学年ボランティア（釜石市、大槌町、山田町）
　　⑤　2014年8月　　２、３学年有志ボランティア（盛岡市）
　　⑥　2014年8月　　３学年有志ボランティア（陸前高田市、釜石市）
　(3)　伝えようとする意識
　　①　文化祭取組（模擬店、パネル展示）
　　②　レポート集『つづける　つなげる　つたえる』
　2　防災活動【そなえる】
　(1)　中学生・高校生による全国防災会議
　(2)　避難訓練の改善
　3　将来復興にどう関わっていくか【いきる】【かかわる】【そなえる】
　(1)　進路選択
　(2)　「岩手県高校生ボランティアプロジェクト」企画

Ⅳ　研究のまとめ
　1　研究の成果
　2　今後の課題

2013年6月13日釜石市唐丹町

Ⅰ　研究のねらい

2012 年４月、東日本大震災当時中学２年生だった生徒たちが高校へ入学した。２名の被災生徒と家庭事情や部活動の希望により本校に入学した生徒を除くほとんどの生徒が盛岡市及びその近郊からの入学生であり、学校で震災の話題に触れることはなかった。震災は過去のものになっていたのか、触れないようにしていたのかは分からないが、盛岡にいる限り通常の生活を送ることができていた。それは職員も同様である。2011 年度よりも震災の話題は減り、ボランティアに出かける職員も少なくなった。

しかし、同じ岩手県の沿岸部が被災し、まだ苦しんでいる人たちがいることを忘れてはならない、そして自分たちでできる何かをしていかなければならないと考え、学年として復興教育に取り組むこととした。

本研究はボランティア活動を中心とした本校３学年の３年間の復興教育の取組を柱とし、その活動を通じて生徒が自ら復興や防災に携わろうとするようになった姿を検証するものである。

Ⅱ　研究内容と方法

1　研究の目標

岩手県立盛岡南高校の３年生は１年次から、東日本大震災の被災県に生きる者として今後の自分たちの在り方を考えようと東日本大震災の被害状況や現在の被災地の様子及び地震のメカニズムなどを学ぶとともに、実際にボランティア活動を行うこととした。

ボランティア活動は継続的に行うものとし、社会福祉協議会や NPO 法人からも協力をいただいた。さらに、阪神淡路大震災から復興の前例を学び、岩手の復興の参考にできることを考えようと、修学旅行の行き先に阪神淡路大震災の被災地である神戸市の「人と未来防災センター」や北淡町の「北淡震災記念公園」（野島断層）を選定した。また、活動の発表の場として文化祭での展示やプレゼンテーションを企画した。

私たちが考えていた活動に加え、生徒たちから出された意見により、避難訓練の改善をはじめとする防災活動や、「岩手県高校生ボランティアプロジェクト」の企画という新しい活動が生まれた。

2　研究の内容と方法（指導計画）

①　2012 年度

月　日	対　象	内　　容	扱　い	委　託	支出
6 月 27 日	全学年	復興教育講演会 講師：岩手県立高田高等学校生徒会長佐々木沙耶さん	総合学習		教育振興費

②　2013 年度

月　日	対　象	内　　容	扱　い	委　託	支出
5 月 22 日	２学年	復興教育ガイダンス 三田正巳学年長	総合学習		
5 月 28 日	２学年	復興教育講演会 講師：岩手日報社　鹿糠敏和記者（前大船渡支局長）	総合学習		

6月13日	2年1組	ボランティア活動 陸前高田市（側溝泥上げ）	総合学習	NPO法人P@CT	副教材費（総学費用）
	2年3組	ボランティア活動 釜石市（畑の瓦礫撤去）		釜石市社会福祉協議会	
6月14日	2年 2、4、5組	ボランティア活動 陸前高田市（国道沿いの花壇の整備）		SAVE IWATE、NPO法人再生の里ヤルキタウン	
6月19日	2年6組	ボランティア活動 山田町（ダイバーが引き上げた海中瓦礫の片付け）		NPO法人ブルーサポートいわて	
7月31日	2年生有志59名、PTA2名	ボランティア活動 陸前高田市（仮設住宅窓ふき、土作りなど）		SAVE IWATE	PTA
8月7日	2年生有志18名、PTA1名	ボランティア活動 もりおか復興支援センター（「復興ぞうきん」お手伝い）		SAVE IWATE	PTA
8月29日～30日	2学年普通科	文化祭　パネル展示、復興模擬店	行事		
10月17日	2学年普通科	講演会「地震のメカニズム」講師：茂庭隆彦副校長	総合学習		
11月27日	2学年普通科	講演会「過去の地震から学ぶこと」講師：佐藤一義副校長	総合学習		
12月3日	2学年普通科	普通科修学旅行　神戸市「人と防災未来センター」見学	行事		修学旅行経費
12月4日		普通科修学旅行　北淡町「北淡震災記念講演」（語り部さんのお話、野島断層見学）			
1月10日～12日	2学年代表3名	「中学生・高校生による全国防災会議」参加			
2月25日	2学年5名	FM岩手盛岡支局「復興支援の輪」インタビュー（OAは3月11日）			
3月	2学年	学習のまとめレポート集『つなげる　つづける　つたえる』刊行			県立学校復興交流推進事業
年間	2学年	コラムノートで震災関係の記事の書き写し（国語科）			
年間	2学年	週番が震災関係の記事をスクラップ			

③　2014年度

月　日	対　象	内　　容	扱　い	委　託	支　出
4月10、21、28日	3学年	分野別学習 ・被災地の課題について学ぶ	総合学習		
5月19日	3学年	分野別学習 ・被災地の課題について学ぶ （5/21の事前学習）	総合学習		
5月21日	3学年	分野別学習・出前講座 ・被災地の課題について学ぶ	総合学習	JICA	教育振興費
6月3日	全学年	避難訓練【大規模地震を想定】	LHR		
6月9日	保護者	3学年学年ＰＴＡ ・生徒による防災意識改善プレゼン・外部講師講演		SAVE IWATE	ＰＴＡ（講師旅費等）
6月10日	2学年	復興教育講演会 講師：赤嵜竜一先生	LHR		
6月11日	3学年	ボランティア活動 釜石市（畑の整備、被災者の方の講話）、大槌町視察　など	総合学習	SAVE IWATE、釜石市社会福祉協議会、NPO法人UnitedGreen	副教材費（総学費用）
	2学年普通科	ボランティア活動 山田町（花壇の整備）		SAVE IWATE、グリーンハート山田	
	2学年体育科	ボランティア活動 山田町（海岸清掃、がれき撤去）		NPO法人ブルーサポートいわて	
6月23日	1学年	復興教育講演会 講師：道下隆文先生	総合学習		
7月8日	1学年	震災遺構見学、語り部さんのお話	総合学習	SAVE IWATE	副教材費（総学費用）
8月6日	2、3学年有志13名	ボランティア活動 もりおか復興支援センター （「復興ぞうきん」お手伝い）		SAVE IWATE	
8月7日～8日	3学年有志7名	ボランティア活動 陸前高田市（けんか七夕引き手の手伝い）、釜石市（菜種の脱穀）		SAVE IWATE、いわて未来づくり機構、NPO法人UnitedGreen	県立学校復興交流推進事業、一部自己負担
8月8日	3学年有志42名	ボランティア活動 釜石市（畑の整備）			

10月2日～3日	3学年	文化祭　パネル展示、復興模擬店	行事		
	2学年	文化祭　パネル展示、被災地の物品販売			
	1学年	文化祭　パネル展示			
10月7日	全学年	避難訓練【大雨災害を想定】	LHR		
		救護訓練 1学年　AED、人工呼吸 2学年　包帯法 3学年　担架搬送		日本赤十字社岩手県支部	ユネスコ減災教育助成金
11月1日～3日	3学年 有志2名	全国青年ボランティア・フェスティバル参加 ・本校のボランティアについて発表		SYD主催	
12月12日	全学年	ショート避難訓練			
1月15日	全学年	ショート避難訓練			
2月21日（予定）	有志	ボランティア活動 釜石市（岩手県高校生ボランティアプロジェクト）		SAVE IWATE、いわて未来づくり機構	
3月（予定）	代表2名	Internatinal Youth Summit in Hyogo2015「防災と環境」参加 ・ポスターセッションによる発表予定		NPO法人JEARN主催	
年間	3学年	週番による被災地に関する記事の収集			

Ⅲ　学習の展開と考察

1　ボランティア活動【いきる】【かかわる】

(1)　現地を知る、地震について知る

①　講演会

実際にボランティア活動に参加する前に、震災当時の状況や現在の状況、被災した方々の気持ち、なぜあのような巨大な津波が街を襲ったのか、など知っておくべきことはたくさんあった。そこで、復興教育講演会を実施することとした。

ア　2012年6月27日復興教育講演会（講師：岩手県立高田高等学校生徒会長　佐々木沙耶さん）

高校に入学して最初の復興教育講演会である。同じ高校生が震災当時どんな体験をしたのか、この1年どのように生活し、今どのような気持ちでいるのかをお話ししてもらおうと、県立高田高校生徒会長で国連平和大使でもあった佐々木沙耶さんをお招きして講演会を行った。当初1学年のみの予定であったが、急遽全学年対象として行われることとなった（1年生の被災生徒1名が講演を聞くことができなかった）。

また、このとき佐々木さんがおっしゃった「微力だけれども無力ではない」という言葉は学年の復興教育のサブテーマとして使われることとなる。

【生徒感想】

平成２４年度　復興教育講演会　感想

2012. 6. 27 実施

1 年	2 組	31 番	氏名

佐々木さんの講演を聞いた感想の記入をお願いします。

■講演を聞いて、心に残ったこととは？

今回の講演を聞いて、私は改めて、東日本大震災の恐ろしさを知りました。私は、今まで東日本大震災の話をテレビかなどでしか聞いたことが無く、初めて被災者から直接話を聞いてその時の状況などがすぐ分かりました。
津波がきた時間で止まっている時計を見た時、私はとても胸がとうけたのを覚えています。
この講演会は今、現在の沿岸の様子を知ることができたし、応援してくれている人が、日本だけでなく、世界中にいるという事が分かりました。

■岩手の復興に向けて、自分が役立てそうなことは何でしょうか？

今回の講演会を聞いて、沿岸の人たちは東日本大震災という大きな被害にあいながらも「前に一歩ずつでも進んでいこう」という気持ちで頑張っていて本当にすごいなと思いました。
物資などは、たくさんの国々から支援を受けていますが、支援や募金など大事な人を失くしてしまった人達の心を癒やすのは簡単にできることではありません。しかし、被害にあった人達の心の支えになることは一番大切なことです。今、私達が出来ることは被害にあった人達の心の支えになることだと思います。働いていない私達は、物を支援することは出来ませんが被災者に寄り添い、話を聞くことは出来ると思います。

ありがとうございました。記入後は担任の先生まで提出してください。

平成２４年度　復興教育講演会　感想

2012. 6. 27 実施

1 年	2 組	14 番	氏名

佐々木さんの講演を聞いた感想の記入をお願いします。

■講演を聞いて、心に残ったこととは？

○微力だけど
無力じゃない

○佐々木さん自らも被災しているのに、友達や地域、日本のために、つらい体験を自分の口から伝えていてすごいなあと思いました。私は、自分のことすら努力することができなくて、自分のことを考えるのが精一杯なので、同じ高校生として尊敬しました。

■岩手の復興に向けて、自分が役立てそうなことは何でしょうか？

私が100円募金したことで被災地が大きく復興することはないけれど、佐々木さんの"微力だけど無力じゃない"という言葉のとおりだと思うので、募金など小さなことにも協力していきたいと思いました。

ありがとうございました。記入後は担任の先生まで提出してください。

イ　2013年５月28日復興教育講演会（講師：岩手日報社　鹿糠敏和記者（前大船渡支局長））

実際にボランティアに行く前に、被災した町の当時と今の様子をお聞きしようと、取材中に被災した新聞記者の方から当時の様子などを講演していただいた。事前学習をするため、鹿糠記者が 2011 年に書いた記事を事前にいただき、それを読んで講演会をお聞きすることができた。鹿糠記者が取材された、ホタテ養殖の方の話から、被災から立ち直ろうとしている人たちもたくさんいることを知り、６月に行くボランティア活動へ向けて気持ちを高めることができた。（この講演会以降は被災生徒も含め、全員が参加した。）

生徒感想

・２年１組女子

実際に被災された、それも記者の方の話を聞いて、２年経った今でも知らなかったことがたくさんあってびっくりした。（中略）あの日私は中学校にいた。停電になったりして大変だったけど、体験したことのない大きな揺れに時々笑っていた自分がとても恥ずかしくなる。

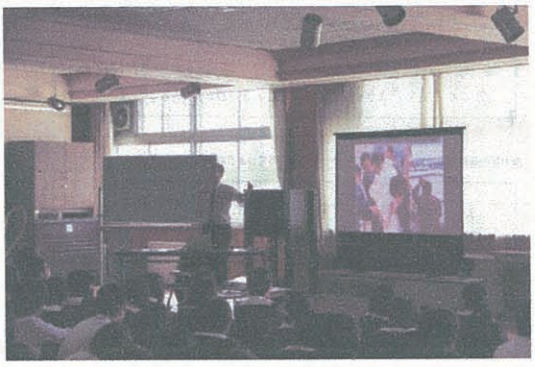
魚の生臭いにおいを嗅いだり、音楽を聴くと震災のことを思い出すというのは初めて知った。ちょっとしたきっかけで思い出してしまう生活をしながらも、被災者は前向きに少しずつ復興に向かっているんだなと思った。震災で亡くなられた方は自分が震災で死んでしまうとは予想もしなかったと思う。だからこそ私たちはこのことを忘れずに暮らしていきたいと思った。６月のボランティアは私ができる精一杯のことをしたいと思う。

今回の話を聞いて震災の苦しみはまだ続いていることに気づかされました。

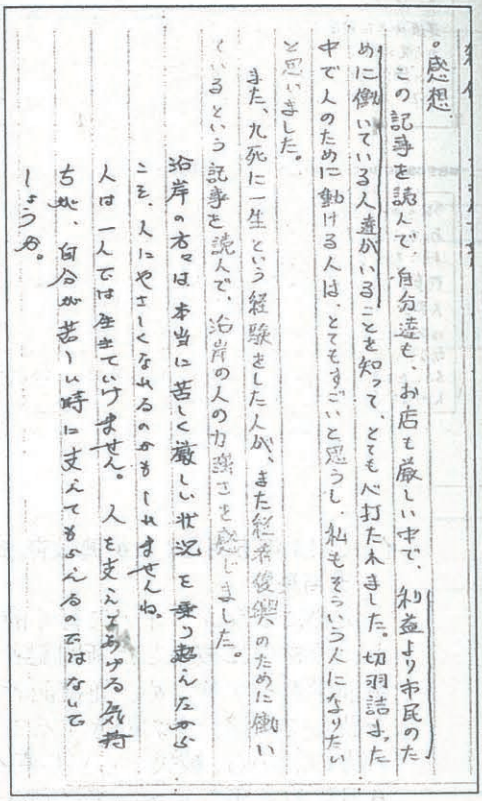
・２年２組男子

僕は正直、二年前のことで自分たちはあまり被害が少なく忘れてしまっていました。しかしまだ仮設住宅に住んでいたり、鉄道がまだ通っていなくて不便な思いをしていること、なくなった家族、友達などを忘れない人がいるということを知りました。（中略）同じ岩手県に住んでいるのに、こんなにも違って申し訳ないと思いました。被災した方は、震災のことを忘れられるのが一番怖いと思っていると仰っていたので、忘れないようにしたいです。

今度、初めて被災地に行くことになっています。行って現状を見るのは少し怖いけど、被災者の人たちの助けになれるようにがんばりたいです。



【上：講演をされる鹿糠記者】



・感想

この記事を読んで、自分達も、お店も厳しい中で、利益より市民のために働いている人達がいることを知って、とても心打たれました。切羽詰まった中で人のために動ける人は、とてもすごいと思うし、私もそういう人になりたいと思いました。

また、九死に一生という経験をした人が、また経済復興のために働いているという記事を読んで、沿岸の人の力強さを感じました。

沿岸の方々は本当に苦しく厳しい状況を乗り越えたのだこと、人にやさしくなれるのかもしれませんね。

人は一人では生きていけません。人を支えてあげる気持ち、自分が苦しい時に支えてもらえるのではないでしょうか。

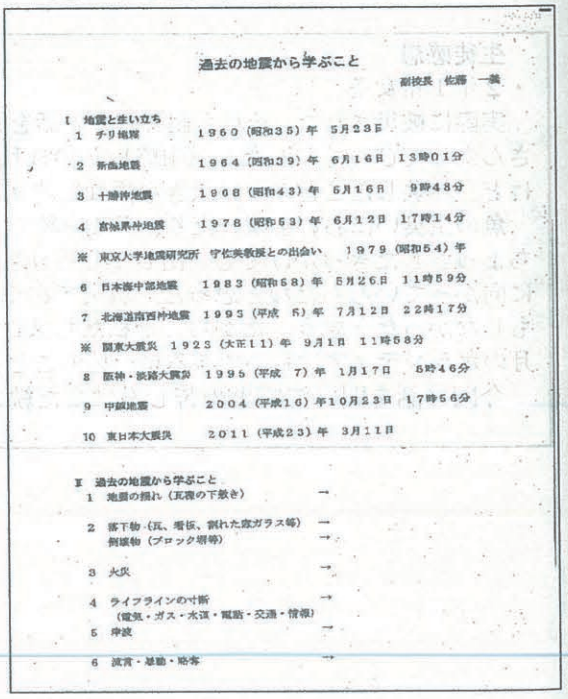
【右：２年１組男子
鹿糠記者が書いた記事を書き写し、感想を書いた「コラムノート」より感想】

ウ　修学旅行事前学習　地震についての講演会（講師：佐藤一義副校長、茂庭隆彦副校長）

普通科は関西方面への修学旅行で、阪神淡路大震災の復興の前例に学ぶため、兵庫県を訪問することになっていた。その事前学習として、本校の副校長からそれぞれの専門の分野における地震についての講演会をお願いした。

10月17日「地震のメカニズム」茂庭隆彦副校長（地学）

茂庭副校長から地震はなぜ起きるのか、という基本的なことをスライドやつる巻バネの実験な



過去の地震から学ぶこと

副校長　佐藤　一義

Ⅰ　地震と生い立ち

1　チリ地震　1960（昭和35）年　5月23日
2　新潟地震　1964（昭和39）年　6月16日　13時01分
3　十勝沖地震　1968（昭和43）年　5月16日　9時48分
4　宮城県沖地震　1978（昭和53）年　6月12日　17時14分
※　東京大学地震研究所　宇佐美教授との出会い　1979（昭和54）年
6　日本海中部地震　1983（昭和58）年　5月26日　11時59分
7　北海道南西沖地震　1993（平成　5）年　7月12日　22時17分
※　関東大震災　1923（大正11）年　9月1日　11時58分
8　阪神・淡路大震災　1995（平成　7）年　1月17日　5時46分
9　中越地震　2004（平成16）年10月23日　17時56分
10　東日本大震災　2011（平成23）年　3月11日

Ⅱ　過去の地震から学ぶこと

1　地震の揺れ（瓦礫の下敷き）　→
2　落下物（瓦、看板、割れた窓ガラス等）　→
倒壊物（ブロック塀等）　→
3　火災　→
4　ライフラインの寸断　→
（電気・ガス・水道・電話・交通・情報）
5　津波　→
6　流言・暴動・略奪　→

【右：佐藤一義副校長のレジュメ】

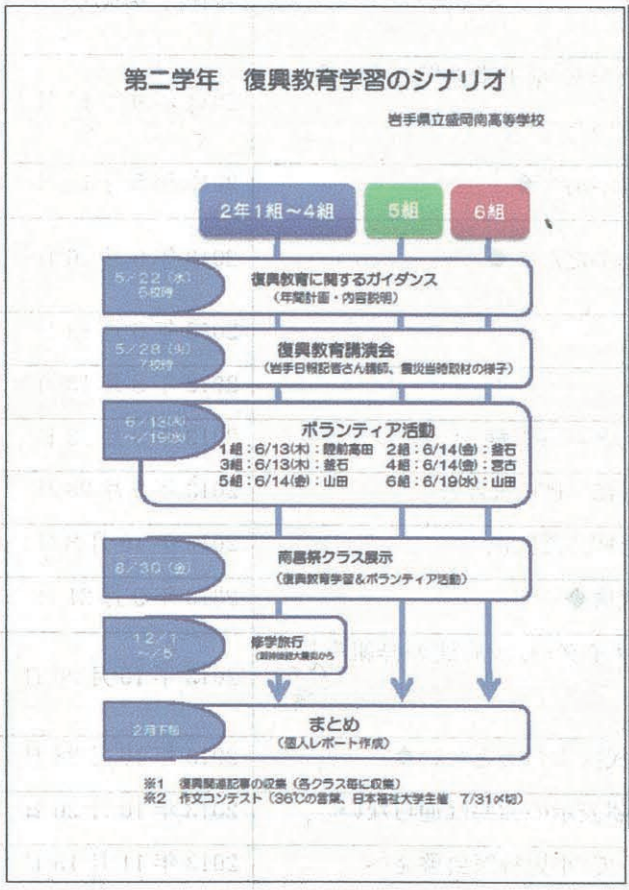
どを交えてわかりやすく講演していただいた。

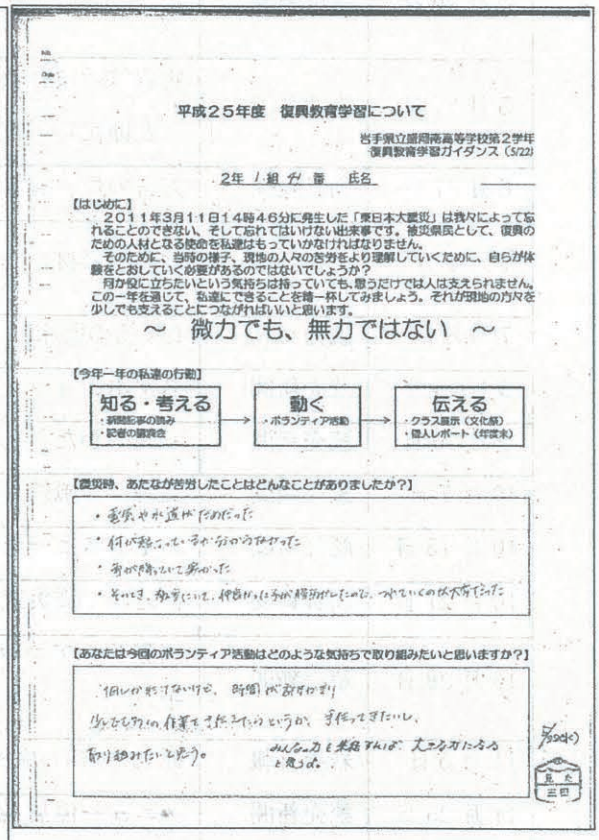
11月27日「過去の地震から学ぶこと」佐藤一義副校長（日本史）

佐藤副校長からはご自身の生い立ちとあわせて過去の巨大地震の様子や被害、またご専門の立場から古文書など資料から読み解いた巨大地震のお話をお聞きし、地震が特殊な災害ではないことを学ぶことができた。

② 復興教育ガイダンス

２学年の復興教育のはじめに、なぜボランティアをはじめとする復興教育に取り組むのかを、学年長の三田正巳先生（現岩手県総合教育センター）がガイダンスをした。はじめに2011年3月11日自分はどこで何をしていたか、震災で最も困ったことは何だったかを各自プリントに書き出した。その後、三田先生が高田高校の生徒が復興に向けて取り組んだ一年の様子をニュース映像やスライドを通じて紹介した。三田先生は、2011年度県立高田高校に勤務をしており、その時の記録をつぶさに紹介していただいた。さらに、来月ボランティアに行く場所は多くの人が亡くなった場所であり、記録のために携帯電話で撮影することは許可するが、ピースをして笑顔で写真を撮るような場所ではないのだ、という話があり、生徒たちそして職員も気持ちを引き締めてボランティアに向かう覚悟を持つことができた。このガイダンスがあったおかげで、なぜボランティアにいくのか、ということが明確になり、その後も活動を継続することができたのだと考えている。





【ガイダンス資料】

③ コラムノート

本校では、国語科の週末課題として、全学年で「コラムノート」に取り組んでいる。新聞のコラムを中心に記事の書き写し、感想、漢字練習等を課している。この学年では１、２年次では記事の書き写しをメインにおこなってきた。２年次には復興教育と関連させ、震災や復興に関連した話題を多く取り上げた。取り上げた記事は以下の表の通りである。これにより、東日本大震災は多くの面に影響を及ぼしていること、復興が思うようには進んでいないことを知ることができた。なお、点検は担任に依頼し、担任がコメントを書いて返却することで生徒とのコミュニケーションにもつながった。また、２年次からは、クラスにスクラップブックを配布し、週番が復興関連の記事を切り抜いて提出するということも併せて行うことができた。

なお、３年次には７月までの全 11 回、「自分の進路に関係がある記事」または「復興に関する記事」を自分で選び、ノートに要約、感想などを書くという発展させた「コラムノート」に継続して取り組んだ。

課題提出日	新聞名	タイトル	新聞掲載日
4月 15 日	産経新聞	余録（サッチャー首相）	2013 年４月 10 日
4月 22 日	読売新聞	再生へ　来訪者の役割◆	2013 年４月 11 日
5月 13 日	読売新聞	教育ルネサンス/幼児の体力◆	2013 年５月４日
5月 20 日	読売新聞	ボストンマラソンテロ/容疑者誤認 SNS が拡散	2013 年５月１日
5月 27 日	岩手日報	物資供給に全社一丸/薬王堂沿岸の店舗◆（鹿糠記者が書いた記事）	2011 年９月 14 日
6月 17 日	朝日新聞	方言の灯、震災が消す◆	2013 年５月 14 日
7月１日	農業共済新聞	地場産素材をふんだんに◆	2013 年６月 26 日
7月８日	読売新聞	ips 初の臨床へ	2013 年６月 13 日
9月 24 日	読売新聞	スマホショック	2013 年８月 13 日
9月 30 日	読売新聞	「国のかたち」と東京五輪	2013 年９月 23 日
10 月７日	読売新聞	猛暑、台風驚異に/IPCC 報告書	2013 年９月 28 日
10 月 15 日	産経新聞	ヘイトスピーチ戒めた判決	2013 年 10 月８日
10 月 21 日	朝日新聞	消えゆく震災遺構◆	2013 年９月 21 日
10 月 28 日	読売新聞	国際リニアコライダー/政府間の枠組み見えず	2013 年 10 月 20 日
11 月５日	岩手日報	孤立を防ぐ/住民同士が支え合い◆	2013 年 10 月 28 日
11 月 25 日	読売新聞	メニュー偽装/誤表示の強弁は通らない	2013 年 10 月 26 日
1月 20 日	読売新聞	スマホ子守やめて/小児科医会啓発へ	2013 年 11 月 15 日
1月 27 日	朝日新聞	天声人語（受援力）◆	2014 年１月 17 日

2月3日	岩手日報	風土計（カー・ディテーリング）	2014年1月19日
3月3日	読売新聞	編集手帳（稲尾和久）	2014年2月17日

◆は震災・復興関連記事

この他にも「コラムノートスペシャル」として2年次でも自分で記事を切り抜いて提出する回が7回あった。

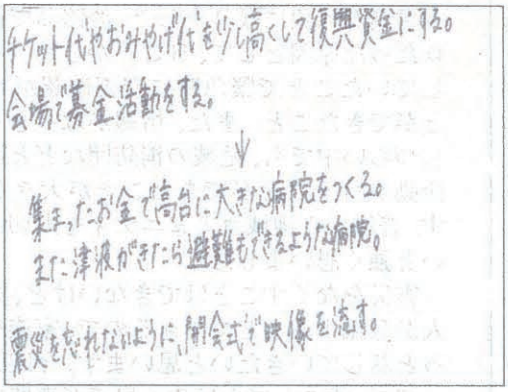
生徒の感想　3年2組男子

一年生からコラムノートをやってきました。はじめは面倒だなと思っていましたが、やっていくうちに文章を深く読むコツや読んだことをまとめる力がつきました。一つのコラムを深く考えることで今まで知らなかったことや発見したことがたくさん見つかりました。（中略）私たちの学年はボランティア活動に積極的に参加してきました。被災地に直接行ってから、震災や被災地についての記事の見方も変わりましたし、私自身も復興に関わっていこうという気持ちもさらに強くなりました。

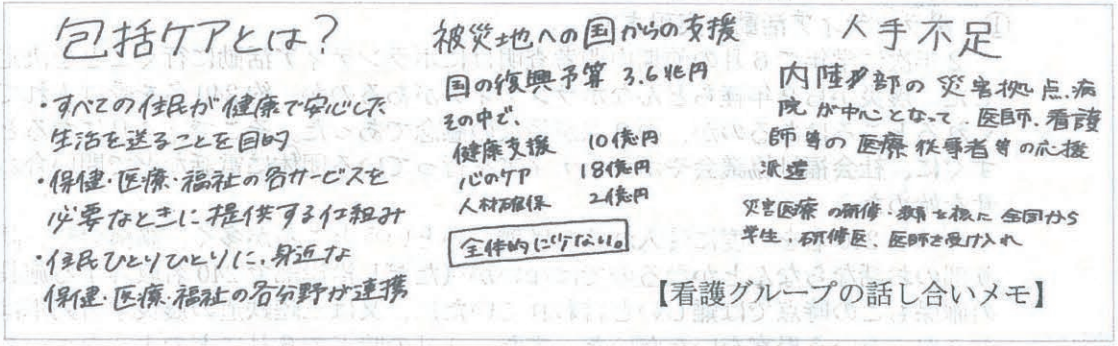
④　グループワーク

この学年の「総合的な学習の時間」の柱は「復興教育」と「進路希望分野別学習」であった。「進路希望分野別学習」の詳細については、本教育研究発表会の「12 生活科/総合的な学習の時間/キャリア教育」分科会「進路希望分野別学習による課題解決力向上を目指して～グループ学習と外部と連携した出前講座を通じて～」（盛岡南高校鈴木紗季教諭）を参照されたい。

生徒それぞれの進路希望に応じてグループを作りクラスの枠を超えて活動した。このグループでは自分たちの進路に関係がある新聞記事を切り抜いて回覧し感想を書き合う「新聞スクラップリレー」を行った。また、生徒が選んだ新聞記事などを基に、自分が進みたい分野で被災地で課題になっていることは何かということを話し合うことを2年次に2回、3年次に1回行うことができた。途中メンバーの出入りがあったり、年度替わりで担当教員が変わったりすることはあったが、生徒自身が課題を見つけ、解決方法を調べるという活動を行うことができた。



【上：看護グループの話し合いまとめ
被災地の人不足、復興かオリンピックかをテーマに話し合ったときのもの】



【看護グループの話し合いメモ】

⑤　修学旅行

２年次、普通科の修学旅行で阪神淡路大震災の被災地である兵庫県神戸市の「人と未来防災センター」と北淡町の「北淡震災記念公園」を訪れた。先に復興を遂げた兵庫県から学び、岩手の復興に生かしていくことができれば、と考えたからである。

「人と未来防災センター」では、阪神淡路大震災の疑似体験をしたり、復興の様子の展示を見ることができ、多くの生徒が時間が足りないと言うほどであった。「北淡震災記念公園」では、実際に被災された方からの講演をお聞きし、地域コミュニティーの重要性を学んだ。さらに野島断層を見学し、地震の威力を改めて目の当たりにした。

帰校後、全員が修学旅行レポートの形で感想をまとめることができた。

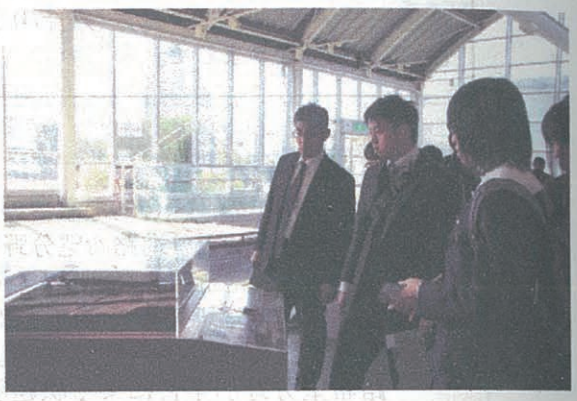
修学旅行レポート　２年３組女子

復興講演会と野島断層見学

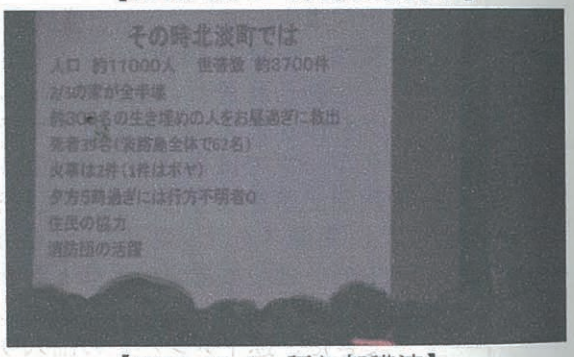
阪神淡路大震災の復興講演会を聞いた中で、『地域コミュニティが緊急時に重要になってくる』という言葉が印象に残りました。淡路島で行方不明者ゼロだった原因として、日ごろから地域の活動に参加していたことで緊急時に安否確認が素早く行うことができたこと。また、情報がはっきりしなく行動しづらい中でも、地域の消防団などと連携して救助活動が行うことができたことが大きかったそうです。普段から地域コミュニティを大切にしていきたいと強く思いました。

震災をなくすことはできないけど、減災は一人一人が意識することでできるので、家族や友人とももっと話していきたいと思います。今回聞いた話を役立てて、すこしでもはやく岩手が復興できるように頑張っていきたいと思いました！

野島断層を直接見てみて、思っていたよりも断層が大きくて驚きました。それほど被害が大きかったのだと思うと怖かったです。地震の怖さを改めて感じて、緊急時の対策について家族ときちんと話し合いたいと思いました。



【2013. 12. 4　野島断層見学】



【2013. 12. 4　語り部講演】

(1)　ボランティア活動の実際

①　ボランティア活動の実現まで

２年次に学年で６月の前期中間考査明けにボランティア活動に行くことを決定した。震災から２年経ちどんなボランティアがあるのか、約240名を受け入れてくれるところはあるのか、の２点が最大の懸念であった。そこで、４月になるとすぐに、社会福祉協議会やボランティアを行っている団体に電話などで問い合わせを始めた。

やはり240名を一度に受入れるのは難しいというところが多く、講演会や、語り部のお話ならなんとかなるのではないか（ただし沿岸部で240名収容する施設の確保もこの時点では難しいと言われていた）、又は三陸鉄道の震災学習列車はどうか、という提案をいただいた。また、４月の時点で６月にどのようなニーズがあるかわからないので検討させてほしいというところもあった。学年としては、話を聞くだけではなく実際に体験することで何かを感じ取ってほしい、という意

向があったため、ゴールデンウイーク明けに連絡をもらえることになったいくつかの団体に絞り、学年で一斉に行くことが難しい場合は、クラス単位で出かけることとした。また、この時期に並行して岩手日報社に、記者の講演を依頼した。

ゴールデンウイーク明けに話を詰めていき、草取りや側溝泥上げなどでは200人くらいでも可能であるというお話もいただいたが、複数の団体にお願いしていたこともあり、

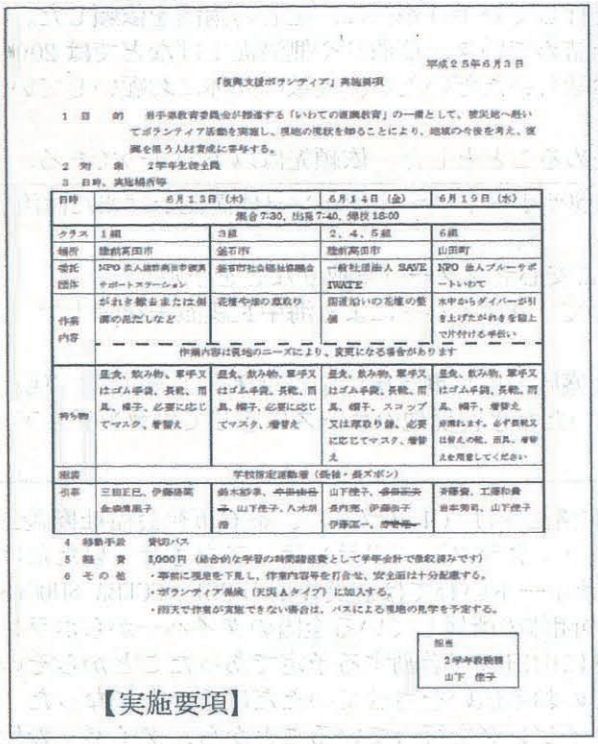
今回はクラスごとに行き先を決めることとした。依頼先は以下の４つである。

・NPO法人P@CT陸前高田市復興サポートステーション（側溝泥上げまたは漁業手伝い）
・釜石市社会福祉協議会生活ご安心センター（草取りなどを予定）
・NPO法人ブルーサポートいわて　（ダイバーによる海中瓦礫撤去を陸上で手伝う）
・一般社団法人SAVE　IWATE〔盛岡市被災地支援活動推進事業実施団体〕（現地のNPO等と連絡調整をしていただき、現地のニーズに応じてボランティア先を決める）

最終的に、NPO法人P@CTでは側溝泥上げ（１クラス）、釜石市社会福祉協議会は唐丹町の個人宅の畑の瓦礫撤去（１クラス）でボランティアをさせていただけることとなった。NPO法人ブルーサポートいわては震災後からSSI（SCUBA SHOOLS INTERNATIONAL）というダイバーの団体の所属している全国のダイバーからボランティアを募り活動している。６月に山田町で活動する予定であったことからその日程にあわせて１クラスが陸上でのお手伝いをさせていただけることになった。本校体育科はマリン実習で体験ダイビングを行っていることから、ダイバーの仕事を見せるのもよいのではないかと考え、このボランティアは体育科が行くこととした。SAVE IWATEからは、いわて未来づくり機構を通じて、陸前高田市のNPO法人再生の里ヤルキタウンがボランティアや観光客を迎えるために国道沿いにひまわりを植えるプロジェクトを実施しているが、種をまく前の花壇の整備に人出がほしいということを紹介していただき、そこに３クラスで伺うことになった。

また、直前には教員が現地の視察をすることとした。ボランティアを行う場所は漁港や国道沿い、または個人宅等であることから、トイレの場所と数、昼食を取る場所、飲み物を買える場所の確認、雨天時の対応の検討が必要である。また、バス会社からは大型バスが入れるか、どこで待機すればよいかを確認してきてほしいと頼まれていた。６月７日に陸前高田から釜石にかけてそれぞれの団体の方に現地を案内していただき、NPO法人ブルーサポートいわての方とは盛岡の事務所で打合せを行った。全ての団体から共通して言われたことは、暑いと思うが危険防止のため必ず長袖長ズボン、長靴を着用すること、逆にやませで寒い可能性もあること、ボランティアは夢中になって行いがちだが、必ず休憩を取りながら行うこと、ということであった。作業内容によっては草取り鎌やシャベル等を持参した方がよいとのことだったので、保護者へのお願いも文書とお知らせメールの２段構えで行った。万が一参加したくないという生徒が出た場合は学校待機とすることにしたが、公欠の生徒以外全員参加することができた。公欠だった生徒の家庭からボランティアに参加させたかったという意見が三者面談で出された。参加できなかったラグビー部の生徒達は夏休みの有志ボランティアに積極的に参加してくれた。最終的に３年生の夏休みまでに全員が１回はボランテアに参加することができた。高総体東北大会の関係で６月に全員が参加できる日程を組むことは困難であったが、日程については今後の課題である。また、職員も出張等の関係で２学年団の職員全員が参加することができなかった。最後の課題で教員間の温度差について述べるが、この点も温度差につながっていることだと考えられる。

夏休みのボランティアも含めて全職員が一度は生徒とともに活動するようにすればよかったのではないか。



平成２５年６月３日

「復興支援ボランティア」実施要項

1 目　的　岩手県教育委員会が推進する「いわての復興教育」の一環として、被災地へ赴いてボランティア活動を実施し、現地の現状を知ることにより、地域の今後を考え、復興を担う人材育成に寄与する。

2 対　象　２学年生徒全員

3 日時、実施場所等

日時	６月１３日（木）		６月１４日（金）	６月１９日（水）
	集合7:30、出発7:40、帰校16:00			
クラス	１組	３組	２、４、５組	６組
場所	陸前高田市	釜石市	陸前高田市	山田町
受託団体	NPO 法人陸前高田市復興サポートステーション	釜石市社会福祉協議会	一般社団法人 SAVE IWATE	NPO 法人ブルーサポートいわて
作業内容	がれき撤去または側溝の泥だしなど	花壇や畑の草取り	国道沿いの花壇の整備	水中からダイバーが引き上げたがれきを陸上で片付ける手伝い
	作業内容は現地のニーズにより、変更になる場合があります			
持ち物	昼食、飲み物、軍手又はゴム手袋、長靴、雨具、帽子、必要に応じてマスク、着替え	昼食、飲み物、軍手又はゴム手袋、長靴、雨具、帽子、必要に応じてマスク、着替え	昼食、飲み物、軍手又はゴム手袋、長靴、雨具、帽子、スコップ又は草取り鎌、必要に応じてマスク、着替え	昼食、飲み物、軍手又はゴム手袋、長靴、雨具、帽子、着替え 作業時は、必ず長靴又は替えの靴、雨具、着替えを用意してください
服装	学校指定運動着（長袖・長ズボン）			
引率	三田正巳、伊藤雄筑 金森隆風子	鈴木妙孝、中居由谷子、山下俊子、八木麻治	山下俊子、中居由谷子 長内亮、伊藤由子 伊藤正一、中居隆一	宇藤貴、工藤和貴 岩本知司、山下俊子

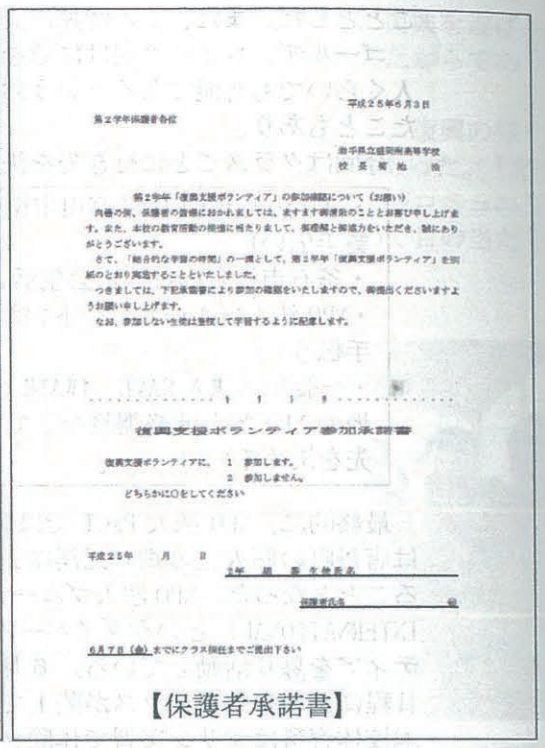
4 移動手段　貸切バス

5 経　費　3,000円（総合的な学習の時間諸経費として学年会計で徴収済みです）

6 そ の 他　・事前に現地を下見し、作業内容等を打合せ、安全面は十分配慮する。
・ボランティア保険（天災Ａタイプ）に加入する。
・雨天で作業が実施できない場合は、バスによる現地の見学を予定する。

担当
２学年教員一
山下　俊子

【実施要項】



平成２５年６月３日

第２学年保護者各位

岩手県立盛岡南等学校
校長　菊地　治

第２学年「復興支援ボランティア」の参加確認について（お願い）

内番の頃、保護者の皆様におかれましては、ますます御清祥のこととお喜び申し上げます。また、本校の教育活動の推進に格たりまして、御理解と御協力をいただき、誠にありがとうございます。

さて、「総合的な学習の時間」の一環として、第２学年「復興支援ボランティア」を別紙のとおり実施することといたしました。

つきましては、下記承諾書により参加の確認をいたしますので、御提出くださいますようお願い申し上げます。

なお、参加しない生徒は登校して学習するように配慮します。

復興支援ボランティア参加承諾書

復興支援ボランティアに、　１　参加します。
２　参加しません。

どちらかに○をしてください

平成２５年　月　日

２年　組　番　生徒氏名

保護者氏名　　印

６月７日（金）までにクラス担任までご提出下さい

【保護者承諾書】

【下見写真①陸前高田市】

【下見写真②釜石市】

② 2013年６月　２学年ボランティア（陸前高田市、釜石市、山田町）

ア　６月１３日　１組　陸前高田市　側溝泥上げ

１組はNPO法人陸前高田市復興サポートステーションP@CTのお世話になり、高田町で側溝の泥上げを行った。この時点で既に嵩上げが計画されていた場所であったが、震災後まだ手つかずの側溝が多くあり、泥上げをすることで遺品が見つかるかもしれないので、慎重に作業してほしいというお話だった。携帯電話はもしかしたらデータを取り出して持ち主に返すことができるかもしれない、とも説明された。作業中実際に携帯電話やアクセサリーなどが見つかった。

この活動は岩手日報やめんこいテレビに取材していただき、その後学校に陸前高田市の方からのお礼の電話が何件かあったということだった。

【2013年6月14日岩手日報】

被災地のために 奉仕の汗

陸前高田市 釜石 盛岡南高生が活動

盛岡市の盛岡南高ボランティアを行い、東日本大震災の被災地の復旧・復興の現状に理解を深めた。

盛岡南高ボランティアを行い、東日本大震災の被災地の復旧・復興の現状に理解を深めた。

（須藤昌良、生徒7人）の2年生約80人は19日、陸前高田市と釜石市で側溝の泥出しやがれき撤去のボランティアを行い、東日本大震災の被災地の復旧・復興の現状に理解を深めた。

陸前高田市高田町では1組の生徒、教員ら約40人が作業し、被災し、解体された市役所や市民会館跡の側溝の泥出しに精を出した。

田中勇人君は「泥出しは体全体がつらい。復興は想像していたよりはるかに大変だ。今後も機会があれば手伝いたいと汗を拭った。

同校2年生は本年度、復興教育に力を入れる。学校ごとにボランティアで現地を訪れており、14日に陸前高田市、19日に山田町での活動も予定している。

陸前高田市の側溝の泥出しに励む盛岡南高生

イ　6月13日　3組　釜石市　畑の瓦礫撤去

3組は釜石市社会福祉協議会のお世話になり、釜石市唐丹町の自力再建した個人宅の畑の瓦礫撤去を行った。現場に行く前に、唐丹町に建てられた明治や昭和の津波慰霊碑と東日本大震災の津波記憶石を見学した。実際の活動ではかつて畑だった場所をまた畑として使えるようにしたいという依頼を受けて、畑の瓦礫撤去と土作りを行った。畑には食器や鍋などが多くあり、どこかの台所がそのまま流されてきたような印象を受けた。また、かなり大きな石もいくつかあり、津波の威力を思い知らされた。

依頼主の方からは市の方針がなかなか決まらないため、自力で自宅を建て直したことなどをお聞きした。また、畑の隣に漁港復興災害復旧工事を行っている株式会社タカヤの現地事務所があり、本校のOBの方が勤務されていたことから、工事現場を見せていただくことができた。その場所では実際にどこまで津波が来たのかなどを教えていただいた。

【畑で土作り】

ブイ（ここまで津波）

【唐丹漁協の山側】

生徒感想　2年3組女子

今回釜石に行ってみてまずびっくりした。というのは、正直「もう2年も経ってるし、ある程度は復興しているでしょ」と思っていたから。見た目はだいたいきれいだった。でも、いざ草取りを初めて見ると、ガラスや割れた皿、はさみ、やかん、がれき。たくさんのものが土の中からできてきた。そうして初めて「全然進んでいないんだ…」と実感した。自分の考えの甘さがすごく申し訳ない気がした。みんなで協力してやったら草や流されてきたものはだいぶなくなり、すごくきれいになっていたのを見て、すごい達成感が生まれたし、やってよかったなって思った。ありがとうっていわれたけど、私は「むしろやらせてくれてありがとう」と心から思った。帰りに海に行って「あそこにも防波堤があったんだよ」「あの高さまで津波来たんだよ」と聞いたときは本当にびっくりした。津波の怖さを改めて知った。

こうやってボランティアをさせてもらったということは自分にとってとてもいい経験になった。この震災のこと、忘れちゃだめだなって思うし、今こうして生きている私たちは亡くなった人のためにも力強く生きなきゃだめだなって思う。またボランティアに行く。必ず。

ウ　6月14日　2、4、5組　陸前高田市　国道沿いの花壇の整備

一般社団法人SAVE IWATE、いわて未来づくり機構の仲介があり、陸前高田市のNPO法人再生の里ヤルキタウンの「ヤルキタウン向日葵プロジェクト2013」（6月22日実施）の実施前の花壇の草取りを行った。陸前高田市に到着後、道の駅の追悼施設で黙祷を行い、陸前高田市企画部長より被害の説明及び謝辞があった。その後クラスごと、さらにグループごとに分かれ、国道沿いの花壇に生えている雑草を抜く作業を行った。土は塩分が含まれて白く固くなっており、土の中からは近くのパチンコ店から流れてきたと思われるメダルやセーターなどが出てきて、津波の悲惨さを想像させるものであった。作業中、国道を通過する多くのダンプカーがクラクションを鳴らしていたのはお礼の合図であったことを知ったり、偶然出会った茨城県から見学に来ていた老夫婦から全員に飲み物等の差し入れをいただいたりと、作業した時間はわずかだったけれど誰かの役に立っている、ボランティアをすることで人の気持ちを動かすことができる、ということに気が付くことができた。

作業後、奇跡の一本松でクラスごとに記念撮影を行い、若干時間があったため、急遽再生の里ヤルキタウン（同市米崎町）に整備予定のヤルキタウン花画廊を見学し、代表の熊谷耕太郎さんから復興への思いなどをお聞きした。

【事前資料】

【2013年6月14日作業風景】

【花壇から出てきたセーター】

生徒感想　２年２組男子

僕は東日本大震災がおきた約２週間後に一度曾祖母の家がある陸前高田市に行きました。（中略）あれから二年経った今、少しは建物も建って来ているのだろうと思っていたので、今回行ってみてきた光景には驚きました。石巻や仙台に行ったときは、海の近くでもたくさん建物があり、観光客も大勢見受けられました。これほど復興の震度に差があるとは思っていなかったので、この地域格差はあまりにも残酷すぎると思いました。

今回僕たちが行った活動は花壇の草取りでした。この活動により夏にはヒマワリが満開になり、地域の人や一本松を見に来た観光客、ボランティアをしに来た人たちの顔が笑顔で満開になることを願っています。

エ　6月19日　6組　山田町　ダイバーによる海中瓦礫撤去を陸上で手伝う

体育科（6組）はNPO法人ブルーサポートいわてのお世話になり、ダイバーが海中から引き上げた瓦礫を陸上で片付ける手伝いと、午後からは漁港に集まられている瓦礫の仕分け作業を行った。ダイバーの方は遠くは関西から来ており、18日の午後に2回、19日の午前に2回海中での作業を行う予定であった。到着時間の関係で19日の2回目の作業のみのお手伝いとなった。この日はあいにくの雨であったが、漁港で瓦礫を引き上げる作業と、1グループのみ漁船に乗せていただきそこで瓦礫を引き上げる作業を行った。海中にはバイクや漁船の部品など大きな瓦礫が残っており、錆びがひどく既に引き上げが困難なものもあるということであった。生徒たちは力を合わせて引き上げを行った。

復興へダイバーとタッグ

盛岡南高2年生　山田町で海中清掃

盛岡市西見前の盛岡南高（菊池浩校長、生徒708人）の体育科の2年生約40人は19日、震災で甚大な被害を受けた山田町北浜地区の海中清掃に参加した。生徒たちはダイバーが海中から回収した震災がれきなどを運び、被災した海の環境回復に一役買った。

雨が降りしきる中、全国から集まったダイバー約20人が海底から拾い上げたがれき差し出せとトラックに運んで海岸で受け取り、せっせと作業が進むにつれ、荷台にはさびきった自転車やぼろぼろのタイヤ、漁具などさまざまな物が積み上がった。

田島巧君は「こんなに多くのがれきが海に残っているとは思わなかった。同じ県民として協力したい」と支援の思いを新たにし、田中泰成君は「復興には長い時間がかかるが、これからもできることをしたい」と誓った。

今回のボランティア活動は、復興教育の一つ。

山田町なをで、全国のダイバーと一緒に海中清掃を続ける盛岡市の青木豆さんに同校が協力を申し出た。

悪天候の中、ダイバーと一緒に海中清掃に取り組む生徒ら

【2013年6月20日
岩手日報】

【船での作業】

【漁港での作業】

【陸上での作業】

生徒感想　2年6組男子

私は今回震災が起こってから初めて被災地に行きました。私はおばあちゃんが山田に住んでいて震災が起きてから行ってなかったので少し不安でした。

最初は海中にある瓦礫をスキューバーダイビングの方があげたものを陸に揚げる作業をしました。私は特別に船でみんなとは別のところで作業しました。海中からあがるものは、トラックの部品や船の部品など重たい物ばかりでした。がれきについているウニや貝殻を見て少し興奮したりしました。

次に陸にあるがれきを分別しました。個々の中には洗濯機やテレビなどがあり、家ごと流されたことが想像できました。服などを見るとこれは誰か来ていたのかと思うと、心が苦しくなりました。今回の経験をしてみて思ったことは、被災地はまだまだ復興に時間がかかると思うので、私たちのできることを岩手県民としてやっていきたいです。

③　2013年夏休み　２学年有志ボランティア（陸前高田市、盛岡市）

ボランティア活動を継続して行おうと考えていたため、夏休みに有志を募りボランティアを実施することにした。できれば被災地の方との触れ合いをメインにした活動ができないかとSAVE IWATEに相談をし、７月31日に陸前高田市の仮設住宅の窓ふき等のボランティア、８月７日に盛岡市でSAVE IWATEが行っている「復興ぞうきん」作りのお手伝いを行うことになった。この活動には保護者も参加したいという申し出があった。

バスの手配の都合上７月11日に実施要項を配布し、17日締切で参加者を募った。

ア　2013年７月31日　２学年有志ボランティア（陸前高田市）

２か所の仮設住宅の窓拭き、土作り、花壇の草取りを行うことになり、夏休み前に４つのグループに分けておき、活動を行った。仮設住宅では始める前に窓を拭いてよいか住民に確認してから作業することなどの注意事項があった。夏休み中で住宅にいた子どもたちとの交流があったり、お年寄りのお話を聞いたりと予定外の活動も多くあり、充実した活動となった。

土作りグループは将来販売するために土嚢に土を詰めるという作業を行い、最後に近くの旅館でシャワーを使わせていただいた。花壇の草取りはNPO法人再生の里ヤルキタウンに再びお世話になり、ヒマワリが咲いた後の花壇の草取りを行った。

【2013年７月31日
仮設住宅窓拭き】

平成２５年７月１１日

夏季休業中「復興支援ボランティア」実施要項

１　目　　的　　岩手県教育委員会が提唱する「いわての復興教育」の一環として、ボランティア活動を継続して実施し、現地の現状を知ることにより、地域の今後を考え、復興を担う人材育成に寄与する。

２　対　　象　　２学年生徒　希望者

３　日時、実施場所等

日時	７月３１日（水）		８月７日（水）
	集合 7:30、出発 7:40、帰校 18:00		集合 13:30、解散 16:00
募集人員	約 80 名		約 20 名
場所	陸前高田市		盛岡市内丸３－４６ もりおか復興支援センター
委託団体	一般社団法人 SAVE IWATE		
作業内容	仮設住宅の窓ふき 住民との交流	土作り、球根掘り 住民との交流	復興ぞうきんの縫い手の方 （内陸避難者）との交流
	作業内容はニーズにより、変更になる場合があります		
移動手段	貸切りバス		現地集合
経費	2500 円（貸切りバス代）		なし
持ち物	昼食、飲み物、軍手又はゴム手袋、雨具、帽子、着替え、タオル、必要に応じてマスク、窓ふきぞうきん、バケツ等	昼食、飲み物、軍手又はゴム手袋、長靴、雨具、帽子、必要に応じてマスク、着替え	後日連絡
服装	学校指定運動着		制服
引率	三田正巳、山下佳子、鈴木紗季		別所尚子、山下佳子

４　申込み　　別紙承諾書に御記入の上、７月１７日（水）までに担任まで御提出ください。

担当
２学年教諭
山下　佳子

【実施要項】

生徒感想（『ボランティア活動の記録　つづける　つなげる　つたえる』より）

・２年４組女子

草取りや、仮設の窓ふき、仮設に住んでいる方々との他愛のない会話。このような小さなことでも復興に大きく貢献できたと思いました。仮設でおばあさんに、「また来てね。絶対また来てね。」と言われたことが忘れられません。小さい子供が言いそうな言葉。おばあちゃんから言われて驚きました。いろいろな地区の人が仮設に振り分けられて、知り合いも少ない中で生活していた高齢者の方は、寂しい思いをしてきたんだなと感じました。震災から３年という月日が経ちましたが、目で見て分かるような復興は進んでいないと私は思いました。一日でも早く以前のような町並みに戻ることを心から願っています。

イ　2013年８月７日　２学年有志ボランティア（盛岡市）

被災地だけでなく、盛岡市内でもボランティア活動は行えることを知ってもらうため、また内陸避難者の方との交流もしたいと考え、SAVE IWATEが2011年８月から行っている「復興ぞうきん」のお手伝いに盛岡市内丸にある「もりおか復興支援センター」にお邪魔した。この活動は、旅館に一時避難していた被災者の方の活動として、支援物資として送られてきた新品のタオルが残っていたことから、それに被災者の方が刺繍をして「ぞうきん」として販売している活動である。現在は内陸避難者の方が作成しており、１枚300円で販売し、150円を縫い手の方にお渡しし、残りの150円は活動費として活用されている。タオルや糸、ちらし等も全て寄付でまかなわれている。この当時は縫い手さんが縫ったぞうきんを持ち寄り、新しいタオルや糸をもらっておしゃべりをするという活動を、毎週水曜日、月に３回盛岡で、月１回は宮古市で行っていた。

東日本大震災被災者支援プロジェクト

手縫い　復興ぞうきん

震災１ヶ月後にスタートした「材料を全国から募り、被災者に縫ってもらった雑巾を全国に向けて販売する」というこのプロジェクトも、今では縫い手さんの登録数は１５０名を超え、製作・販売したぞうきんは約５万枚（2013年４月現在）。ご購入や材料のご提供を通して、全国から多くの力強いご支援をいただいています。同時に、縫い手さん同士が集える場、「話ぎサロン」も２年になります。

復興ぞうきんは１枚３００円。そのうち１５０円は縫い手さんにお支払いし、残りの１５０円も、材料費、販売経費、人件費、広告費などを含む活動運営費として、全額このプロジェクトに活用しています。

★縫い手さんの声

○家が全壊し夫もにくして、今でも泣いてばかりですが、人に言うことでもないので外では笑っていると、色々言われて気が滅入ります。ぞうきんを縫っている間は、そういう事が気にならなくなります。

○ぞうきんでいただいたお金は貯めていて、自分以上に困っている人や、震災でなくなった兄弟のお墓に供えるお花などに使っています。

○支援してくれてる方にこれ以上甘えるわけにはいかないって思うんだけど、ぞうきんだけはずっと縫いたいの。目標がなくなってしまう。

○復興ぞうきんに来て得た一番の収穫は、家族ぐるみで付き合える友だちができたこと。ここへ来るとほっとします。縫えることも買ってくださることも本当にありがたいですよ。

★販売所

<盛岡市内>もりおか歴史文化館、カフトク、JR盛岡駅２階
<東京>遠野まごころネット東京事務所
<静岡>復興支援カフェしずおか　など

＊この他カ口座振込による通信販売も行っております。

★募集中

以下の材料を常時募集していますので、ご協力をお願いいたします。
・刺繍糸・刺し子糸、刺繍針、チャコペン、タオル

（＊活動支援金のご寄付も随時募集しています。）

【復興ぞうきんのちらし】

活動場所の広さから20名を募集したところ２名の男子を含め生徒18名、保護者１名が参加した。参加できない生徒、職員にもタオルや糸の寄付の募集をかけた。当日の活動はタオルや糸の仕分け、縫い手さんが持ち寄ったぞうきんの検品、帯巻きなど多種にわたり、お手伝い終了後に縫い手の方とお茶を飲みながら交流することができた。また、復興ぞうきんを８月に行われる文化祭で販売させていただけることになった。

【タオルの仕分け】

【作業後の交流】

【復興ぞうきんの作品と帯】

生徒感想　２年３組女子

センターの方や縫い手さんたちと楽しく交流しながら復興のための活動ができ、本当によかったです。

復興ぞうきんのデザインはどれも個性的で直線や円で芸術的な物から、花火やうちわなどの絵を描いている物まで様々でしたが、どのぞうきんもあたたかい気持ちがたくさんつまっているものでした。その気持ちが、この活動をこんなに大きく盛んにしたのだと思います。

ぞうきんを売ることも復興の一歩だと思いますが、それ以上にこの活動を通して人と人とがつながることや、「復興」を目指してこのような活動に参加されている方々が笑顔で優しく明るい気持ちで活動していること自体が復興につながる一歩だと感じましたし、そんな活動に少しでしたが参加できて本当によかったと思います。心のこもった復興ぞうきん。私たちも心を込めて販売したいです。

④　2014年６月　２、３学年ボランティア（釜石市、大槌町、山田町）

2013年度は２学年だけの活動となった点が学校としての反省であった。そこで、2014年度は全学年がボランティア活動や被災地見学に出かけることができるように計画した。今年度も主にSAVE IWATEに活動を委託し、日程を調整していただき、２、３学年は全クラス前期中間考査明けの６月11日の月命日に活動できることになった。それぞれの学年の担当者が１名ずつ６月５日に下見に出かけた。

ア　３学年ボランティア

３学年は、２学年末から次年度の活動を模索した。進路希望別分野学習をスタートさせていたことから、ボランティアも分野別に行うことができないか、SAVE IWATEに相談をしていた。いくつか候補があったが、沿岸部の事業所は人手不足でボランティアの受入が困難な場所も多く、こちらの希望通りにはならなかった。さらに、釜石市社会福祉協議会にも相談したところ、福祉分野選択者（15名）と保育分野選択者（９名）はそれぞれ老人ホームと児童館での受入が可能というお返事をいただいた。また、NPO法人UnitedGreenを紹介していただき、１クラスはこちらでお世話になることになった。人数の関係で４組がこちらでボランティアをすることとした。

SAVE IWATEに紹介いただいたプランは釜石市の鵜住居地区防災センター跡地の追悼施設での黙祷及び被災者の方からのお話、鵜住居地区の仮設住宅の方が作業している畑の草取りであった。当初はそのプランどおり釜石での活動のみを計画していたが、大槌町出身生徒の母親から、大槌町も見て市町村による復興の違いを感じてほしいと申し出があり、鵜住居に行く５クラスは午前中大槌町視察、お昼から鵜住居という日程になった。NPO法人UnitedGreenでお世話になる４組と福祉分野選択者、保育分野選択者は14時半までそれぞれの活動、その後大槌町を視察することとした。

大槌町では、仮設道路を通過し社内から水門と旧大槌町役場を見学し、赤浜で下車し、民宿赤武（観光船はまゆりが屋上に上がった旅館）や東京大学海洋研究所を外から見学した。その後

雨天のため、鵜住居地区防災センター跡地ではなく、事前にお借りしていた釜石東中学校体育館で黙祷を行い、鵜住居地区にお住まいの両川吉信さんから震災当時のお話をしていただいた。また、鵜住居地区復興まちづくり協議会の皆さんからまちづくりへの思いをお聞きすることができた。その後、鵜住居地区にある「にこにこ農園」に移動した。ここには被災地の方の生き甲斐作りとして、被災地の方が作業している畑と、鵜住居地区復興まちづくり協議会がラグビーのワールドカップ誘致に向けて釜石のぶどうでワインを作る計画をしており、そのためのぶどう畑がある。ぶどう畑のほうが雑草が多いということだったので、ぶどう畑で作業することになった。午後の短い時間ではあったが、約200人での作業であったのであっという間にきれいにすることができた。

NPO法人UnitedGreenにお世話になったクラスは、同法人が行っている「菜の花プロジェクト」のお手伝いをした。菜の花は土の中の塩分を除去する作用があり、また花を見て楽しむことができ、菜種は油として使用できることから菜の花を植えているということだった。今回は釜石市橋野町の菜の花を植える畑の草取りを中心に作業した。代表の山田周生さんはバイオディーゼルアドベンチャーとして世界を巡り、2011年３月11日にたまたま釜石におり、その後釜石で活動をされているということで、手作りの自家発電装置なども見学させていただいた。

福祉分野選択者は釜石市平田のあいぜんの里で老人介助などのボランティアを行った。保育分野選択者は栗林児童館で子供たちと遊び、お昼寝の時間には震災当時のお話を聞いてきた。保育園ではなく児童館として運営している理由などをお聞きし、改めて被災地域の人不足を実感することができたようだった。この３つのグループは鵜

住居地区防災センター跡地で合流し、黙祷後、大槌町を視察した。民宿赤武では解体した観光船はまゆりの復元活動の中心になっている方と偶然お会いし、当時の様子や復元の意義などをお聞きすることができた。

2014.6.12 岩手日報

忘れまい 被災地で誓う

震災3年3カ月

盛岡南高生が奉仕

【2014年6月12日岩手日報】

【菜の花プロジェクト】

【にこにこ農園　作業後集合写真】

イ　２学年ボランティア

２学年は普通科はSAVE IWATEのお世話になり、山田町のグリーンハート山田でボランティアをした。この団体では被災した場所に水仙を植えていたが、その場所が三陸復興道路の工事にかかるため、水仙の球根を掘り出してほしいという依頼であった。体育科は昨年同様NPO法人ブルーサポートいわてのお世話になった。しかし、この日はダイバーの参加が少なかったため、海中瓦礫撤去と海浜清掃の２グループに分かれての活動となった。生徒の目には当然触れさせなかったがこの日は遺骨が上がったそうだ。２、３学年とも11日に行った意義を感じてくれたのではないだろうか。

【２学年ボランティア
事前説明を聞く】

生徒感想

・２年１組女子

山田町でのボランティアを追えて、復興の現状を目の前にし、震災のすごさを改めて感じました。私たちが行ったボランティアは水仙の球根を掘り出す作業だったが、土の中からごろごろした石が出てきたり、木の折れた枝が出てきて津波の影響を実際に見ることができました。生い茂る草を抜き、水仙の球根を抜き、私たちは単純な作業しか行っていませんが、少しでもお役に立てたと思うとうれしく思います。

ボランティアだけでなく、被災した土地を見て驚きました。外壁だけの建物、家の床の一部が残った物などが目に入りました。あたり一面、土の色というのが印象的でした。このように、今回のボランティアをきっかけに積極的に復興への力になりたいという強い思いを持つことができました。一日でも早く、山田町などの被災地に活気が戻り、明るい色に色づいた土地に近づくため力になりたいと思います。

・２年６組男子
自分は今日山田町に行って一番最初に思ったのは、復興はあまりしていないと実感しました。自分の思っている以上に復興が進められていないことに、なぜ３年も経っているのに何も進んでいないのだろうと思いました。（中略）最初にゴミ拾いをしていたら、震災の時に流された物がたくさんあり心が痛かったです。そして海から上がってくるゴミはいろいろな物がありました。網や木、鉄などがあり、生々しく、とても見ていられませんでした。そして一日終わって帰るときは複雑な心境でした。今回自分たちのしたことは復興とは言えませんが、ほんの少しのたしになれたらうれしいです。これからも自分ができることをしてきたいと思っています。

⑤　2014年８月　２、３学年有志ボランティア（盛岡市）

今年の夏休みも「復興ぞうきん」のお手伝いを行った。２年生はボランティアに一度行ったものの３年生と比べまだまだ意識が低いことが課題であり、２、３年生の有志で行くことになった。３年生は９名が申し込んだが、２年生からの応募がなく、担任から何度か声をかけてもらい４名が参加した。今年度「復興ぞうきん」の活動は各週の水曜日に行っているとのことだったので、８月６日に行った。活動内容は昨年と同様である。３年生の中にも初めて参加する生徒もおり、昨年も参加した生徒が教えながら作業することができた。この活動に参加した３年生から、後輩へ活動を引き継いでいくことが課題だという声が上がり、冬に後輩を連れてボランティアに行こうという案が出てきた。

⑥　2014年８月　３学年有志ボランティア（陸前高田市、釜石市）

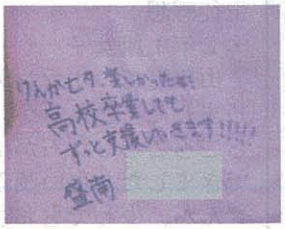
今年度は夏休みに有志ボランティアを行うことを年間計画に盛り込んでおり、課外の日程と調整をし、８月７～８日に実施することとなった。このボランティアもSAVE IWATEに委託した。生徒たちからは、盛岡から行くと早くても10時半ごろから３時頃までしか作業ができないので、もっと時間を掛けてボランティアをやりたいという意見が上がっており、宿泊と日帰りの２つのグループにわけて実施することにした。

宿泊組は宿泊する民宿の関係で20名で募集をかけたが、7名の参加希望であった。７日陸前高田市のけんか七夕の引き手のお手伝いをすることになった。この祭りも盛り土の関係で来年以降実施できるかわからないということだった。また、休憩時間にはうごく七夕も見学することができ、さらに山車に乗せていただくという大変貴重な体験まですることができた。そして地域の方と様々なお話をすることができ、たくさんのことを感じることができたようだ。帰りは大槌町の吉里吉里海岸を見学し、町内の旅館に宿泊した。２日目は、はじめに大槌町の城山公園から町内を臨み、その後釜石市のNPO法人UnitedGreenで、菜種油の脱穀作業のお手伝いをした。

日帰り組は42名が参加した。８日に宿泊組と合流するプランとし、同じくNPO法人UnitedGreenで収穫後の畑の石取りや草刈りなどを行った。

【けんか七夕】

【うごく七夕の山車の上】



【寄せ書きメッセージ】

【脱穀作業】

【畑の石取り】

生徒感想

・３年３組女子（宿泊組）

今回は今までのボランティアではやったことのないものをたくさんでき、私にとって良い経験になりました。特に「けんか七夕」に参加したり、「うごく七夕」の山車に実際に乗せていただいたことは貴重な体験でした。また、少しずつ復興が進んでいくことはうれしいことですが、「けんか七夕」などの行事を続けることができなくなるかもしれないという現状も知りました。文化はなくしてほしくないと思いました。吉里吉里海岸は想像していた海岸とは何かが違っていました。近くにかかっている橋は震災時のままなのかフェンスが大きくゆがんでいたり、電灯が斜めになっているのを見ました。２日目に「菜の花プロジェクト」で菜種の脱穀をお手伝いをさせていただきましたが、短時間でしかもなれない手つきの私たちがやって本当に力になれたのかというとそうは言えないと思うので、これからも回を重ねてお手伝いしたいです。

・３年２組男子（日帰り組）

菜の花には土の中の塩分を吸収する力があるし、育った菜の花の種から食用油や自動車や機械を動かすエネルギーになるなど、菜の花のすごさを初めて知りました。午前中は菜の花を刈った後の畑の石拾いをしました。畑にはかなりの漁の石が転がっていて、私たちは20人１グループで１時間程度やりました。人手が足りていないのに、やらないといけないことがたくさんあってすごく苦労しているんだなぁと思いました。午後はすばらしい講演会をしていただいたり、ソーラーでためた貴重な電気で扇風機をつけていただいたり、本当にありがたく思い、午後のボランティアの草刈りを午前以上に頑張りました。今回は貴重なお話を聞くことができて良かったです。自分も将来本当にやりたいことができたらいいなと思いました。

(3) 伝えようとする意識

自分たちの活動がメディアで伝えられその反響があったり、家族や親戚、友だちに話をすると興味を持ってもらえたという経験を生徒たちがするようになると、自分たちの経験や感じたことをもっと多くの人に知ってもらいたいという思いを生徒たちが持つようになった。３年生になると自主的に新聞に投書する生徒もいた。学年としてはまず校内で伝えること、それによって地域に伝えること、そしてまとめのレポート集を作りお世話になったところに送ることで自分たちの気持ちを届けようとした。

【2014年10月４日岩手日報】

成26年）10月4日（土曜日）　オピニオン（10）

復興に支援に「私にもできる」

盛岡市　高校生　17歳

売したい。各クラスの　に話ねることは難し　「身近にできる支援」

◇盛岡市内のカフェ　復興に向けて現地のしょく、より多くの支援を

つるをはじめとする調　動を行ったためには、続ける活動を続け、微力で

「KAKERU」が国　味を考慮した料理を　岡市にいながらにして

出したいし、その売り　あっても復興に携わる

上げを被災地へ寄付し　可能な活動を増やす必

たいことも、食べて復　ことをしていきたい。

始めたという記事を読　ど言えない。

み、「食べて復興支援」　また、被災地を観察

するという支援の形も　今後はこのような

あることを知った。　機会があること思った。

盛岡南高校で私の学　私は高校でボランテ

年は、1年生から復興　ィアとして被災地を訪

に向けた活動を行って　問し、さまざまな形で

おり、文化祭では復興　支援に参加してきた。

支援に参加してきた。　しかし、年に3回程度

しかし、年に3回程度　のボランティア活動で

のボランティア活動で　は、復興のための力に

沿岸の特産品や「復　なれているとは正直ま

興ろうさん」などを販

売したり、各クラスの　に話ねることは難し　「身近にできる支援」

復興に向けて現地のしょく、より多くの支援を

つるをはじめとする調　動を行ったためには、続ける活動を続け、微力で

「KAKERU」が国　味を考慮した料理を　岡市にいながらにして

出したいし、その売り　あっても復興に携わる

上げを被災地へ寄付し　可能な活動を増やす必

たいことも、食べて復　ことをしていきたい。

始めたという記事を読　ど言えない。

み、「食べて復興支援」　また、被災地を観察

するという支援の形も　今後はこのような

あることを知った。　機会があること思った。

盛岡南高校で私の学　私は高校でボランテ

年は、1年生から復興　ィアとして被災地を訪

に向けた活動を行って　問し、さまざまな形で

おり、文化祭では復興　支援に参加してきた。

支援に参加してきた。　しかし、年に3回程度

しかし、年に3回程度　のボランティア活動で

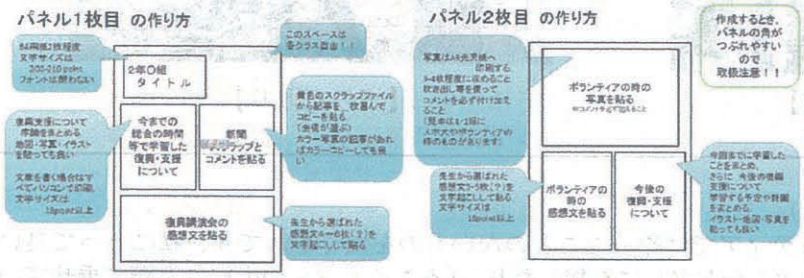
のボランティア活動で　は、復興のための力に

沿岸の特産品や「復　なれているとは正直ま

興ろうさん」などを販

① 文化祭取組（模擬店、パネル展示）

2013 年８月の文化祭で、２学年は自分たちが行ったボランティア活動をクラスごとにパネル展示でまとめた。１クラスにつきポップコーア２枚を使用し、これまでの講演会の感想や、週番の切り抜きで集めた被災地の状況が分かる新聞記事なども加えてパネルを作成した。また、有志ボランティアの陸前高田と復興ぞうきんでもそれぞれ２枚のパネルを作成したほか、12 月の修学旅行の事前学習として阪神淡路大震災についてのパネルも作成した。



【パネル作成についての指示】

【２年２組パネル】

また、２年生普通科４クラス（体育コース除く）が模擬店を行うことになっていたので、被災地の食材を使った模擬店を行う、という条件を付けた（体育科と体育コースは食堂運営）。その結果、１組は小海老を使ったお好み焼き、２組は田野畑アイスクリームを使用したクレープ、３組は陸前高田のマスカットサイダーを使ったフルーツポンチ、４組は宮古の塩を使用したバナナチョコを販売した。午前中で準備した被災地の食材がなくなるクラスがあるほど大好評であった。

【２年３組模擬店】

また、学年企画として総合学習係を中心として被災地の物品を販売する復興模擬店も行った。陸前高田市の物産センターなどに協力いただき、八木沢醤油店の醤油や味噌、缶詰、シューアイス、マスカットサイダー、そして復興ぞうきんなどを販売した。また、この復興模擬店の売り上げは全額 SAVE IWATE に寄付することとなった（10 月 10 日代表２名寄付）。

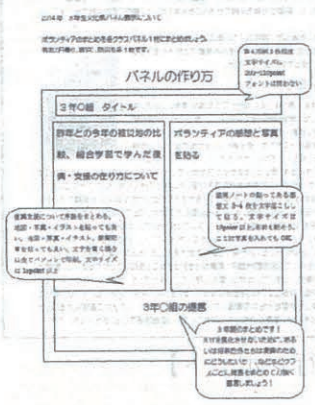
【2013 年復興支援模擬店】

2014 年の文化祭は 10 月に実施した。生徒課から「私たちは 3.11 を忘れない」という文化祭のコンセプトが出され、学校あげて復興支援を謳った文化祭を行うこととなった。模擬店は３年生のみとし、２年生普通科はクラス企画を実施した。ボランティアや被災地見学のパネルは全学年が作成した。３学年は１クラス１枚とし、各クラスの復興への提言を入れた。夏休みのボランティアの宿泊組、日帰り組も１枚ずつパネルを作成した。復興ぞうきんのパネルは２年生が作成した。２年生と１年生はクラスごとに２枚ずつのパネルを作成したほか、１年生は被災地見学の感想を一人 A４用紙１枚ずつにまとめて展示した。

模擬店については、３年生は６クラス全てが出店することとなっており、昨年同様被災地の食材を使った模擬店とした。１組は菜の花プロジェクトで作っている菜種油を使用して焼いた薄焼きと久慈の光泉サイダーを使った「アイスサイダー」、２組は山田の手焼せんべいを使ったパフェ、３組は八木沢醤油を使用した白玉団子、

４組も八木沢醤油を使用した玉コン、５組は野田の塩を使用した白玉、６組は同じく野田の塩を使用した焼き鳥を販売した。また２年２組が復興支援模擬店を行い、今年度はボランティアに行ったご縁で山田町の道の駅から仕入れたほか、菜の花プロジェクトの菜種油、復興ぞうきんを販売した。さらに宮古水産高校にお願いし缶詰と塩プリンを販売することができた。

また、校内発表のステージ発表では３年生が分野別学習の学習の成果をプレゼンテーションした。分野によっては被災地の現状と課題を発表する分野もあり、後輩たちに伝えることができた。



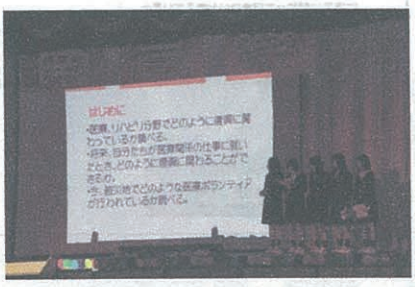
【３年パネル作成指示】

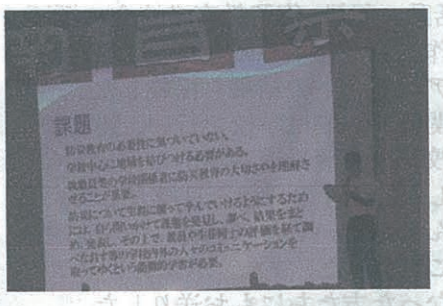
【上：３年６組パネル】

【３年パネル展示教室
比較のため昨年度のパネルも展示した】

【左：１年１組パネル】

【上：２年４組パネル】





【左：３年ステージ発表】

【３年１組模擬店とポスター】

【２年２組復興支援模擬店】

② レポート集『つづける　つなげる　つたえる』

2013年度の活動を全員がレポートにまとめ、冊子として残すことになった。はじめに、12月の修学旅行後に時間割を変更して各クラス２時間ずつ情報処理室を使えるようにして、修学旅行レポートとボランティアレポートをそれぞれＡ４養子１枚ずつ作成した。レポートはひな形を提示した。修学旅行については、普通科は「神戸の復興の事例から学んだこと」と「自主研修を中心とした修学旅行の思い出」、普通科体育コースと体育科は沖縄への修学旅行及びマリン実習のであるため「平和学習で学んだこと」と「修学旅行の思い出またはマリン実習で学んだこと」とした。

2013 修学旅行事後レポート

2 組 23 番 名前

1 阪神淡路大震災からの復興や町作りから学んだこと。

2 自主研修 ～飾る！作る！食べる！～。

【修学旅行レポート】

ボランティアのレポートは、「ボランティア活動を通じて学んだこと」と「これからどのように復興に関わっていきたいか」を書かせた。数名ボランティアに参加していない生徒は、復興教育講演会や神戸で学んだことなどを盛り込むように指示した。修学旅行とボランティア活動で生徒が携帯電話で撮影した写真は、提出しても良い写真の中からベスト３をメールで添付で提出してもらい、フォルダに保存して、職員が撮影した写真と併せてレポートに使用できるようにした。写真は１つのレポートに１枚以上使うこととした。時間内に終わらなかった分は放課後等の時間を使いながら冬休み明けまでに提出することとした。

2013 復興教育「つづける　つなげる　つたえる」学習レポート

6 組 22 番 名前

1 ボランティア活動を通して感じたこと、学んだこと。

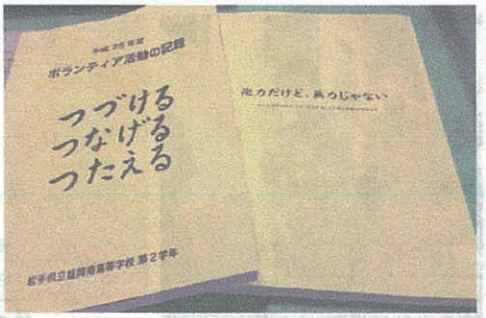
2 1年間の震災学習から学んだこと、そして、これから自分はどのように復興に関わって行きたいと考えているか。

【ボランティアレポート】

また、活動の記録、復興教育講演会の概要、文化祭で作成したパネルの写真、「復興教育」に関するアンケートの結果も掲載した。

予算の関係で印刷は学校で行い、製本費用は県立学校復興交流推進事業から支出し業者に依頼した。２月の刊行を目標としていたがずれ込んでしまい３月末刊行、４月に生徒・職員に配布した。また、ボランティアでお世話になった方たちにもお送りした。

このレポート集を作成したことで、自分たちの一年間の活動を振り返り、被災地にこれからも思いを寄せ続けようという気持ちを改めて持つことができたと思う。また、学年全員のレポートが掲載されていることで、他者の思いも交流することができた。さらに家庭に持ち帰ることで家族へも伝えていくことができたのではないだろうか。



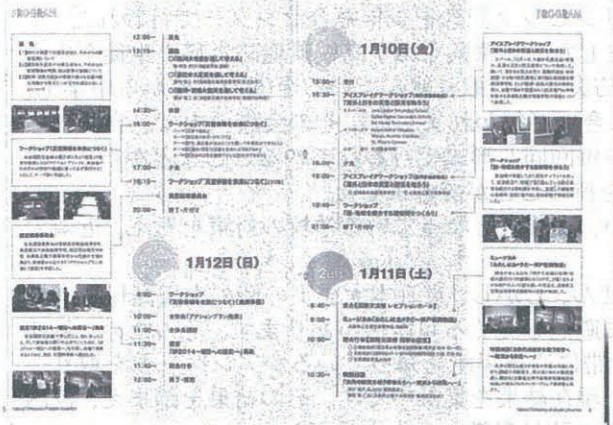
【レポート集】

2　防災活動

(1)　中学生・高校生による全国防災会議

2014年１月10～12日に東京の国立オリンピック記念青少年総合センターで開催された「中学生・高校生による全国防災会議」に参加させていただくことができ、２年生代表３名が参加した。この会議への参加がきっかけで本校の避難訓練が大きく変わることとなる。

この会議は、2012年２月の「高校生による全国防災ミーティング2012」、同年12月の「中学生・高校生による全国防災ミーティングin東北」を経てその集大成として世界の被災地にも目を向け、これまで培ってきた防災のノウハウを共有し、「次代の防災を担う人材」の育成、防災意識と社会参加意識の向上を目的とし開催された。参加校は阪神淡路大震災の被災地である兵庫、東日本大震災の被災地の東北、南海トラフ地震で被災の可能性がある地域などの中高生及び中国、スリランカ、ネパールの中高生であった。講義やアイスブレイクワークショップで海外や国内の災害や防災の事例を学び、ワークショップではそれぞれの活動を紹介する壁新聞を作ったり、「災害体験を未来につなぐ」にはどうしたらよいかをテーマごとに話し合った。グループワークは兵庫県立舞子高等学校環境防災科の生徒が各グループのリーダーを務めて進行された。最後に提言起草委員会により「絆2014～明日への提言～」が発表された。なお、この提言は１月22日に文部科学省に提出された。



【会議プログラム】

【2014年１月10日ワークショップ風景】

絆2014

～明日への提言～

私たちは，日本各地から集まってきた中学生と高校生です。2011年の3月11日に発生した東日本大震災は，日本の未来に大きな問題を投げかけました。自然の驚異は，これまでのすべてを見直す生き方を迫りました。そして，たくさんの方々が，今もなお先の見えない不安な日々を送っています。

私たちは，今の自分ができることは何か，何をしなければならないのかと，あの日からずっと考え続けてきました。
そして，どんなに小さな力であっても，多くの仲間が力を合わせれば，その願いは，必ず世界中まで届くと，実感するようになりました。

これまで，2012年2月に兵庫県で，高校生による全国防災ミーティングを開催しました。1995年1月17日に発生した阪神淡路大震災で大きな被害を受けた淡路島から，まず高校生から行動することを表明しました。

2012年12月に宮城県で，中学生・高校生による防災ミーティングを開催しました。東日本大震災で大きな被害を受けた宮城県から，次世代だけでなく同世代にも，千年後にも震災の教訓を伝えようと発信しました。

2014年1月には東京都で，中学生・高校生による全国防災会議を開催し，参加した中学生・高校生で作り上げたアクションプランを，ひとりひとりが忘れないで実行できるように，わかりやすく覚えやすい5つの提言にしました。

日常のささやかな取り組みを通して得た知識，想い，経験などを個人から地域，地域から日本，そして世界へ広げていってほしいです。

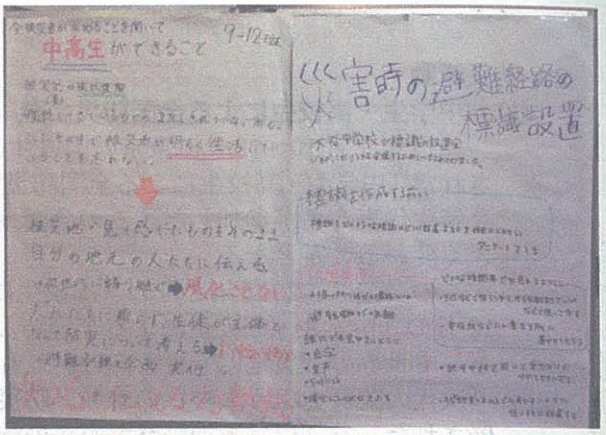
1. 私たちは，自分たちの趣味や特技を復興支援や今後の防災活動に活かしていきます。
1. 私たちは，普段の挨拶や行事への参加によって地域とつながり，助け合える関係をきずいていきます。
1. 私たちは，身につけた知識や経験を自分なりの表現で伝えていきます。
1. 私たちは，自然の美しさや恵みについても理解と感謝をし，共存していきます。
1. 私たちは，決して一人ではないことを忘れません。

『ひとつ上』の自分になって，また会いましょう！

2014年1月12日

中学生・高校生による全国防災会議

【「国・地域を紹介する壁新聞をつくろう」】



【「災害体験を未来につなぐ」アクションプラン】

本校から参加した３名の生徒から、以下の感想及び本校に対する提言が提出された。

「中学生・高校生による全国防災会議」に参加して

2-1　　、2-2　　、

私たちは、2014 年１月 10～12 日に国立オリンピック記念青少年総合センターで行われた「中学生・高校生による全国防災会議」に参加しました。兵庫県立舞子高校環境防災科の生徒を中心に、東日本大震災の被災校や、ボランティアや防災活動に取り組んでいる全国の学校から中学生、高校生約 400 人が集合し、防災について話し合いが行われました。その会議の中で、自分たち自身が避難場所を知らないことや、避難訓練が毎回同じ形式で行われていることなどから、本校は防災意識が低いのではないか、と課題意識を持つことができました。

そこで、今後、本校の避難訓練の改善を求め、避難所となっている学校の対策を考え、近隣の小中学校へ提案することを考えています。

公立高校の多くは指定避難所になっていません。しかし、東日本大震災の時の山田高校や大槌高校のように、災害時に地域の方が公立高校に避難してくる可能性があります。そのため、見前中学校、見前南中学校学区の地域住民約 50 世帯に避難場所を知っているかアンケートを取り、地域の防災意識を明らかにしたいと考えます。現在結果を集計中です。その結果を踏まえ、校内への提案や小中学校への提案を行い、この学区の防災意識の向上を目指します。

今後、以下の三点について提案する予定です。

（１）避難訓練の改善

石巻西高校では、東日本大震災の際、掃除用具ロッカーが倒れ通路をふさぎ避難できなかった場所があったことを聞きました。他校でも昼休みや抜き打ちで訓練をしている学校が多かったです。また、ネパールでは先生の声が聞こえない状態をつくるなど負荷をかけた状態で避難訓練をしているそうです。あらゆることを想定した避難訓練が必要だと考えます。

①停電時校内放送ができないことを想定した避難訓練
②防火扉が閉まった状態での避難訓練
③抜き打ちでの避難訓練
④移動教室が多い時間帯での避難訓練　　など

（２）洪水対策

2013 年８月６～７日のような大雨になった場合の対策を取る必要があります。実際に自宅に帰れなくなった生徒もいましたし、地域の人が避難してくる場合も考えられます。

（３）避難所としての役割

公立高校は避難所になっていませんが、多くの人が避難してくる可能性があります。その際に本校では食料や毛布の備蓄はあるのか、どこに備蓄するか決まっているのか、検証したい。また、東日本大震災の際は、毛布の備蓄がなかった学校ではカーテンを裂いて利用するなど工夫したそうです。そのように、代用できるものがあるのか、平時のうちに考えてあらゆる想定をしたうえで、緊急時には想定外のことに対応できるようにしていきたいと考えます。

(2) 避難訓練の改善

(1)で述べたとおり、生徒から本校の避難訓練改善提案がなされた。本校のこれまでの避難訓練はLHRがある日に、生徒は昼休みに逃げるための外靴を教室前廊下に用意し、LHR前に外靴に履き替え、教室で担任から避難経路等の説明があった後に緊急放送が鳴り、避難をするという訓練のための訓練であった。これでは東日本大震災や2013年８月に起こった大雨被害などのような災害が起こったら自分の命を守ることはできないのではないか、と生徒たちは考えた。また、他校や海外の避難訓練の例を聞き、実際の災害を想定した訓練を行わないと、実際に災害に遭ったときに命を守ることができないと学んだ。

そこで、６月３日の避難訓練では大規模地震を想定した訓練を、２回目の10月７日は大雨を想定した避難訓練を行うこととした。また、できれば避難所開設訓練も行いたいと考え、「アクサ　ユネスコ協会減災教育プログラム」助成金に申請したところ助成校として採用いただいたことから、10月にはさらに避難所開設訓練や救護訓練を行う計画を立てた。なお、避難訓練は総務課の担当であるが、復興教育の一環として行っていくため、復興防災教育担当として私も携わっていくことになった。

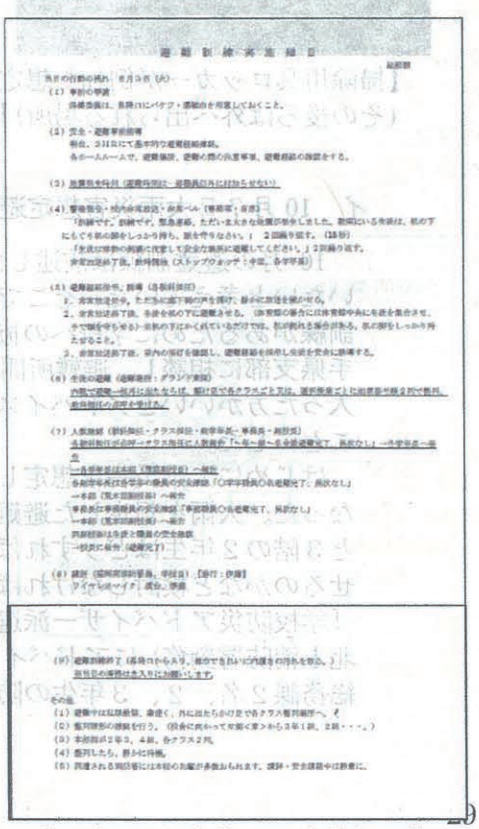
平成２５年度避難訓練実施要項

【平成25年度第２回実施細目】

ア　６月３日大規模地震想定避難訓練

６月の避難訓練は、「中学生・高校生による全国防災会議」に参加した３名の生徒が中心となり、地震で昇降口前のガラスケースが倒れ通行できない、蛍光灯が落下している、天井から電線がぶら下がっている、掃除用具ロッカーが倒れた、防火扉が閉じてしまいゆがんで開かない、などの災害想定をし、職員との打ち合わせを行った。実際の災害時には計画されている避難経路が使えない可能性が高いので、避難経路を知った上で違う経路をとっさに判断して避難させるようにした。行う時間は一部の職員以外には一切周知せずに行うこととしていたが、校長判断により、通常の避難経路が使えないことは職員に伝えられた。

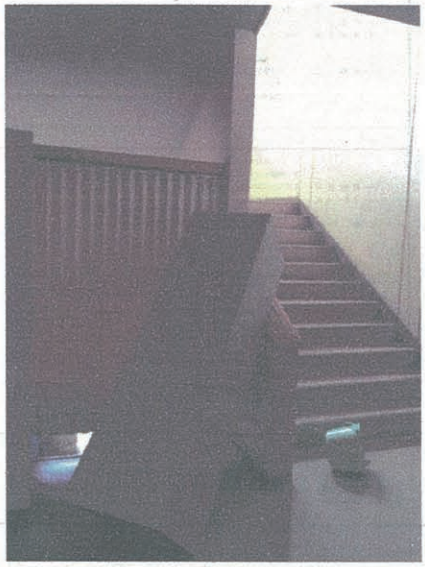
当日は有志生徒も加わり、実施１時間前から準備を行った。できるだけ負荷を掛けるため、移動教室が多い時間を避難訓練の



【平成26年度第１回実施細目】

時間とし、14時20分に地震発生の放送が入り、教科担任の誘導でグラウンドへ避難した。職員は避難経路をある程度予想できていたことから、スムーズに避難することができた。この訓練は新聞社や放送局が多く取材に来校し、生徒たちの思いを伝えることができた。また、避難後の講評を防災会議に参加した生徒が行い、1、2年生からも防災リーダーとなって活動する生徒を募集したところ2年生の将来消防に就職を希望している2名が立候補してくれるという実りのあるものとなった。

【右：防火扉が閉じたがゆがんで、小さな扉だけが開く想定での避難】



【掃除用具ロッカーが倒れた想定（その後ろは外へ出られる場所）】

生徒の提案で地震避難訓練

盛岡市西見前の盛岡南高（佐々木一夫校長、生徒一〇二人）は3日、大地震直下型地震を想定した避難訓練を行った。生徒の発案で抜き打ち時に初、1月から防災を具体的に学ぶ、授業の一環として訓練を実施した。

秋の市総合防災訓練に参加できなかったことを踏まえ、市消防本部の協力を得て、生徒の提案で実施した。

震度6強の揺れが発生したとの想定で、校内放送が流れると全員が机の下に潜り、ゆがんだ防火扉が開かない、ロッカーが倒れ、ガラスが散乱しているなかでの対応を学んだ。

1月に東京で開かれた「中学生・高校生に聴く全国防災会議」に参加した生徒3人が、震災当時の状況を説明した。

盛岡市防災課の職員が「まず身を守り、次に人を助ける。情報共有を心がけて」と話した。

盛岡3年の田村知真さん（一五）は「災害は起こり得る。家族に話題はかかっていた。みんなの意識が高まった」と手応えを感じていた。

盛岡市防災課の職員が「まず身を守り、次に人を助ける。情報共有を心がけて」と話した。

【2014年6月4日岩手日報】

イ　10月7日大雨災害想定避難訓練及び救護訓練

10 月の避難訓練は前述したとおり予算も付いたことから避難所開設訓練を行いたいと考えていた。そこで、市役所や消防に相談をしたが、秋は市の総合防災訓練があるために学校への協力は難しいと言われた。そのため、日本赤十字社岩手県支部に相談し、避難所開設は自治体がやるものなので、その訓練は自治体が入った方がいいとアドバイスを受け、今回は日本赤十字社に救護訓練を依頼することにした。

はじめに大雨災害を想定した避難訓練を実施し、午後に救護訓練を行うことになった。大雨を想定した避難訓練は前例がなく、避難の必要がない2階の3年生と3階の2年生はどうすればいいのか、1階の1年生は大雨の中どこに避難をさせるのかなど検討しなければならないことが山積みであった。そこで、9月9日に「学校防災アドバイザー派遣事業」を活用して地域防災サポーター高橋主夫氏（元北上消防署勤務）にアドバイスをいただき、副校長2名、復興防災教育担当1名、総務課2名、2、3年生の防災リーダー5名でお話をお聞きした。当日は岩手県

総合防災室防災危機管理担当の方も２名来校され、高橋さんのお話に加えてさまざまアドバイスをいただいた。大雨災害想定の場合は、実際に逃げるという訓練は少ないが、簡易土嚢作りなどできそうなことはたくさんあることが分かった。しかし、避難訓練自体は授業の後半の 20 分程度を予定していたため、今回は生徒の訓練よりも、分割授業等でも職員が確実に点呼がとれるかに重きを置くことにした。

そこで、当日は記録的短時間大雨情報が発表されたため、２階以上に避難をするという想定にした。１年生は２階にあるカルチャーホールへ避難、２、３年生は移動教室だった生徒も全て HR に避難し点呼を取り、避難指示が出されたので解除になるまで学校に待機する旨家庭に伝える訓練をすることにした。実際に家庭に電話をするまではせず、朝の SHR で回収しているケータイ電話を HR に持って行き実際は家庭に連絡をいれること、電話回線が混線で使えない時は災害伝言ダイヤル 117 を使用することなどを伝えた。さらにその後、玉山区好摩と八幡平市寄木の生徒は松川が氾濫したため、盛岡市湯沢地区と矢巾町煙山地区に住んでいる生徒は土石流が発生したという想定で会議室に集め安否確認を行う訓練を実施した。

予想通り２、３年生は教室で点呼後何もすることがない時間が若干続いてしまったが、午後からは、学校が避難所になったときに備えて、あるいは地域にいるときに近くの学校に避難することを想定して救護訓練を行うのだという説明をした。

午後の避難訓練では、まず非常食となるアルファー米と保存水を説明し、実際にアルファー米に水を入れ救護訓練後に試食することとした。救護訓練は学年ごとに行った。

・１学年　心肺蘇生、AED（第一体育館）各クラス４グループに分かれて実施。
・２学年　三角巾を使った包帯法（カルチャーホール）二人一組の訓練と、各クラス４グループでの訓練。
・３学年　搬送訓練（第二体育館）各クラス４グループでの訓練。担架と毛布を使用した搬送訓練。

終わった学年から第一体育館に戻り、アルファー米を試食した。そして各学年から代表１グループが出て、ステージ上でデモンストレーションを行い、この日学んだことを全校で共有することができた。

生徒感想　３年６組女子

私たちは今回救命救急について各学年ごとに分かれて学んだ。３年生は搬送の仕方を教えていたただいた。担架と担架がない場合の毛布での対応も体験した。私は今までただのせて運んでいるだけだと思っていた。しかし、担架による搬送では、傷病者のことを第一に考えた搬送の仕方が細かいところまで行き渡っていてびっくりした。例えば、歩くときは傷病者が揺れないように傷病者の頭のところにいる一人は左足から、それ以外の三人は右足から歩く、と工夫されていた。また、一番に傷病者の頭を守ること、四人で協力して行うことなので「よし」と合図や声がけをすることが大事なのだと思った。

最近では地震や火事、土砂崩れなど様々な自然災害が多くなっている。いつそのような状況になるか分からない中で、もし身近で救命救急が必要な場合は自分たちが積極的に助けに行き、今日学んだことを活かせるようにしたい。

【３学年　毛布を使った搬送訓練】

【アルファー米試食】

【デモンストレーション】
【１学年　AED】

【デモンストレーション】
【２学年　包帯法】

盛岡タイムス　2014年

盛岡南高　豪雨想定で本格訓練

全国防災会議参加の生徒提案

避難や救護、搬送訓練

【2014年10月８日盛岡タイムス】

ウ　ショート避難訓練

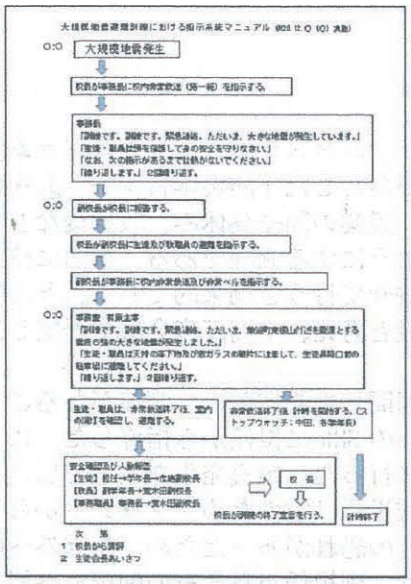
９月に一関市と気仙沼市で行われた「アクサ　ユネスコ減災教育プログラム」の教員研修会に参加した。気仙沼市教育委員会が発行した『防災学習シート』をいただき、そこで「ショート避難訓練」を知った。授業の間や昼休み、放課後などいつどこにいても、教員がいなくても避難できるようにする訓練である。事前に校内のどこが危険なのかというシュミレーションも併せて行うと効果的である。どんな場面でも命を守れる生徒を育てるため有効な手段と考え、中間反省会議で提案し、12月と１月の２回実施することになった。

この訓練は実施日を特定せず、「避難訓練週間」を設定した。訓練があること、各自で頭を保護し避難することなどを週の初めのSHRに担任から指導した。12月は２年生が修学旅行から帰って来た週の昼休みに行った。地震発生を放送で伝え、頭部を保護し、外へ逃げる訓練を計画した。避難場所は雪のためグラウンドから昇降口前駐車場に変更したが、インフルエンザ流行の恐れがあったため、急遽外への避難は中止とし、正・副担任が教室で点呼を取り、副担任が職員室の副校長へ報告することとした。このことに関しては事後アンケートで生徒から「どんな状況でも外に逃げなければ訓練の意味がない」という意見が多くあげられた。また、本校は大教室（盛南ルーム）やトイレには放送が入らないが、やはりトイレにいた生徒は指示が分からなかったという意見が多かった。また、放送がはっきり聞こえないという意見もあった。３年生は昼休みに行うのではと予想していた生徒も多く緊張感がなかったという生徒もいた。反面１、２年生は突然の訓練だったため緊張感を持って本番のように頭を保護することができたという意見が多かった。また、職員の点呼は副学年長が取ることになっていたが、教室で点呼を取っている職員が大半であることや、３つの学年とも副学年長は担任であることから、このシステムは機能しないことが判明した。また、事務室でも毎回担当者が緊急放送をすることになっていたが、ショート避難訓練の日に担当者が不在となるが、他の人は緊急放送の仕方がわからないということが事前に判明し、全員が緊急放送を入れられるように毎回担当を代えて実施している。

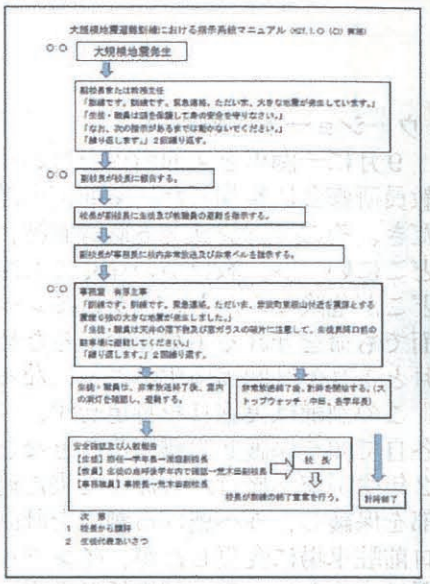
１月の訓練は３校時終了後の業間に行った。今まで第一報は事務長が職員室に来て放送を入れ、その後事務室で校内非常放送を入れていたが、地震発生直後に副校長が直ちに職員室で放送を入れることに変更した。本部（職員室）に全員の安全確認が報告され、各クラスでアンケートを実施後訓練終了となった。今回も外への避難を中止にしたが、体育館への避難などを検討すればよかったのではないかと考えている。

今後は放送が入らない場所は教員が声をかけて歩く必要がある。さらに、火災や竜巻など様々な災害を想定した訓練を積み重ねていきたい。また、訓練もいろいろな時間、いろいろな場所にいるときに行い、より実践的なものにしていきたい。また、校舎内の危険図マップなどを生徒自身で作成できればより効果的であろう。なお、放課後の訓練については部活動中で放送が聞こえにくく、統制がとれずかえって危険なのではという意見が教員から出され、見送ることとした。

【2014年12月12日ショート避難訓練】



【12月避難訓練指示系統マニュアル】



【１月避難訓練指示系統マニュアル】

3　将来復興にどう関わっていくか

今まで本校の生徒は、３年生になると「進路に有利」「推薦のネタに」という理由でボランティアに参加する生徒が多く見られた。しかし、今年度の３年生の生徒はボランティア活動と防災活動を行い、自分たちが復興の担い手となる、3.11 を風化させないという強い思いを持つことができた。更には復興支援以外のボランティアにも自主的に参加する生徒も多い。本章では、その現れとなった進路選択と、２月 21 日に予定している「岩手県高校生ボランティアプロジェクト」企画について考察する。

(1)　進路選択

１年次から進路希望別分野学習を取り入れ、２年次の後半からはそれを本格化させることで進路意識を早い段階から持たせる工夫をしてきた。自分が学びたい分野、将来就こうと思っている職業はどういう面で復興に貢献できるのか、ということをたびたび考えさせてきた。その結果が分野別学習のまとめのプリント（2014 年６月 16 日実施）や、日本郵政グループから依頼された「手紙の書き方授業」（2014 年 12 月現代文の授業で実施）でボランティア先等にお礼の手紙を書いたときの内容に現れているので紹介する。

分野別学習まとめプリントより

・３年１組女子（公立短期大学推薦合格）

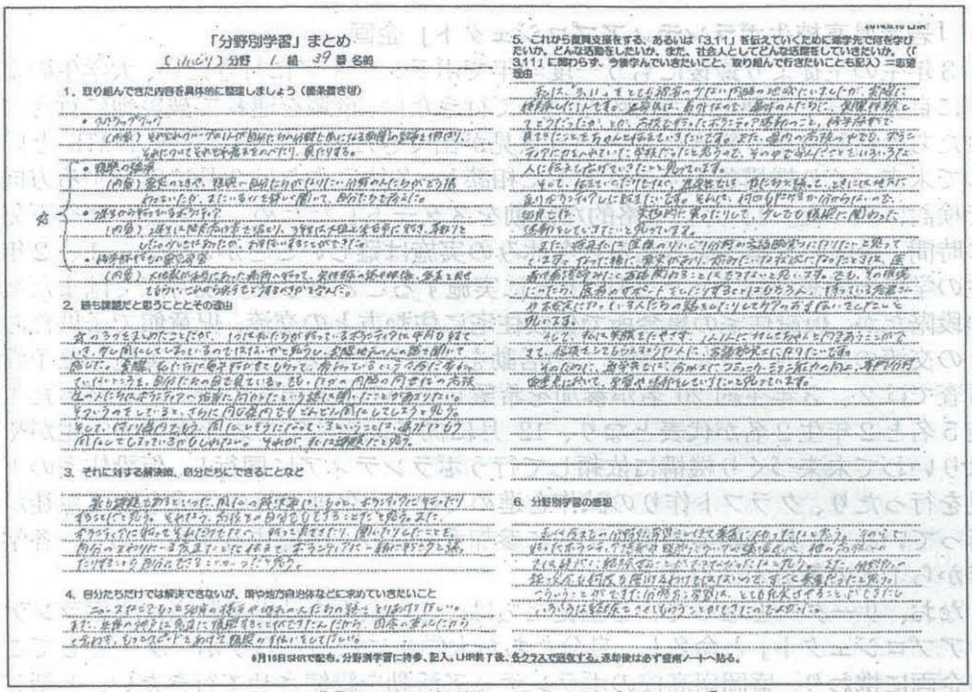
進学先ではグラフィックデザインを学び、3.11 など震災の恐ろしさなどを絵で表現していろいろな年代の人に伝えていければ良いと思う。また復興に協力できることは積極的に取り組んで行きたい。私がデザインしたもので、人々に興味・関心を持ってもらい、また自分がどのように考えてデザインしたのかがみんなに伝わるような物をデザインしたい。伝えるだけでなく、私の作品を見て誰かが行動を起こしてくれるようなメッセージ性のあるデザインをしたい。

・３年１組男子（国立大学教育学部推薦合格）

自分は教育の分野に進学するので、教育の分野からの復興の方法を学んで行きたい。今の考えは、教育学部に進学し、教員となって教育による社会貢献をしていきたい。その中で、現在の学校でやっているように被災地に行って復興に携わって行きたい。

・３年１組男子（私立大学薬学部推薦合格）

薬学部に入ることができたならば、薬剤師になるためには人と話すためのコミュニケーション能力が必要となるので、そのコミュニケーションを学び、被災地に行き、被災者の人たちとコミュニケーションを取り、心の傷を和らげていけるような活動をしたい。さらに本職である薬剤師としての活動も被災地でやっていきたい。例えばたくさんの家を回り、薬の使用について指導したり薬を提供できたらいいなぁと思った。



「分野別学習」まとめ

〔 〕分野　組　番 名前

1．取り組んできた内容を具体的に整理しましょう（箇条書き可）

[illegible]

2．最も課題だと思うこととその理由

[illegible]

3．それに対する解決策、自分たちにできることなど

[illegible]

4．自分たちだけでは解決できないが、国や地方自治体などに求めていきたいこと

[illegible]

5．これから復興支援をする、あるいは「3.11」を伝えていくために進学先で何を学びたいか、どんな活動をしたいか、また、社会人としてどんな活躍をしていきたいか。（「3.11」に関わらず、今後学んでいきたいこと、取り組んで行きたいことも記入）＝志望理由

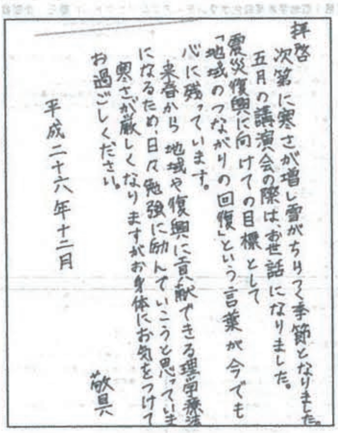
[illegible]

6．分野別学習の感想

[illegible]

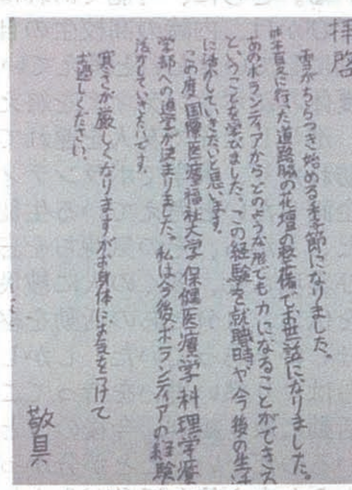
9月10日SHRで配布。分野別学習に持参、記入。LHR終了後、各クラスで回収する。返却後は必ず進路ノートへ貼る。

【「分野別学習」まとめプリント】



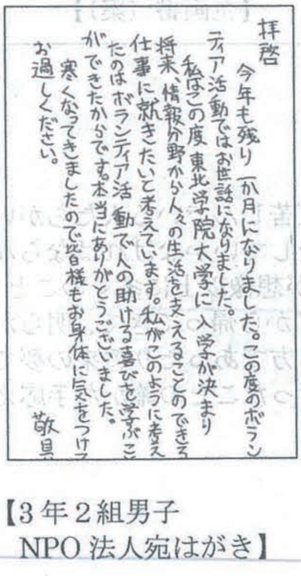
拝啓
次第に寒さが増し雪がちりつく季節となりました。
五月の講演会の際は、お世話になりました。
震災復興に向けての目標として
「地域のつながりの回復」という言葉が今でも
心に残っています。
来春から地域や復興に貢献できる理学療法士
になるため、日々勉強に励んでいこうと思っています。
寒さが厳しくなりますがお身体にお気をつけて
お過ごしください。
敬具
平成二十六年十二月

【3年1組男子
出前講座講師宛はがき】



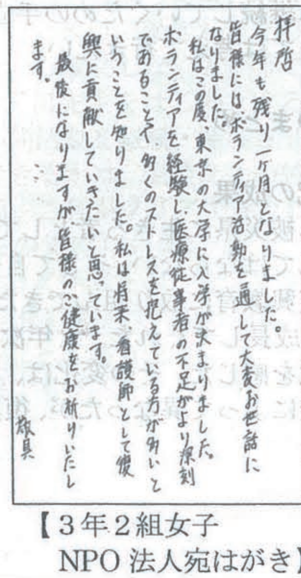
拝啓
雪がちらつき始める季節になりました。
昨年夏に行った道路脇の花壇の整備でお世話になりました。
あのボランティアからどのような形でも力になることができる
ということを学びました。この経験を就職時や今後の生活
に活かしていきたいと思います。
この度国際医療福祉大学保健医療学科理学療
学部への進学が決まりました。私は今後ボランティアの経験
活かしていきたいです。
寒さが厳しくなりますがお身体にお気をつけて
お過ごしください。
敬具

【3年1組男子
NPO 法人宛はがき】



拝啓
今年も残り一か月になりました。この度のボランティア活動ではお世話になりました。
私はこの度東北学院大学に入学が決まり
将来、情報分野から人々の生活を支えることのできる
仕事に就きたいと考えています。私がこのように考え
たのはボランティア活動で人の助ける喜びを学ぶこと
ができたからです。本当にありがとうございました。
寒くなってきましたので皆様もお身体に気をつけて
お過ごしください。
敬具

【3年2組男子
NPO 法人宛はがき】



拝啓
今年も残り一ヶ月となりました。
皆様にはボランティア活動を通して大変お世話に
なりました。
私はこの度、東北の大学に入学が決まりました。
ボランティアを経験し、医療従事者の不足がより深刻
であることや多くのストレスを抱えている方が多いと
いうことを知りました。私は将来、看護師として復
興に貢献していきたいと思っています。
最後になりますが、皆様のご健康をお祈りいたし
ます。
敬具

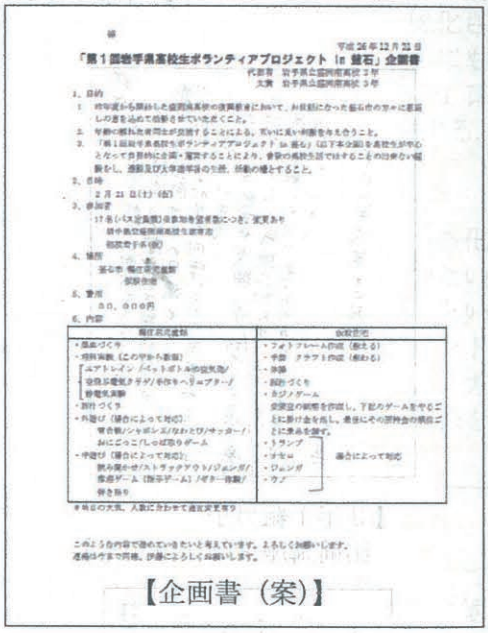
【3年2組女子
NPO 法人宛はがき】

(2)　「岩手県高校生ボランティアプロジェクト」企画

３年生の生徒より最後にもう一度学年でボランティアに行きたい、大学生のように自分たちで企画をしたものを持って行きたい、後輩を連れて被災地に行き自分たちの活動を引き継ぎたいという意見が出てきた。そこで、SAVE IWATE といわて未来づくり機構釜石サテライトに相談し、冬休みまたは２月に実施する方向で検討に入った。11 月に本格的な活動をスタートしたため、打ち合わせや下見の時間、企画の立案等を考えると冬休みの実施は難しいことがわかり、１、２年生の学年末考査が終了した２月 21 日に実施することとした。現時点ではまだ案の段階だが、仮設住宅の集会所で仮設住宅に住む方との交流、児童館で子供たちとの交流の２グループに分かれての活動を予定している。12 月に実施した予備調査では２、３年生約 20 名が参加を希望している。3 年生の特に熱心だった生徒５名と２年生２名が代表となり、12 月に同じ仮設住宅で岩手大学の学生がやはりいわて未来づくり機構に依頼して行うボランティアに同行し、仮設住宅の下見を行ったり、クラフト作りの試作を進めている。企画書等の作成も全て生徒が行っている。１月の始業式後に正式に参加者を募り、実施する予定である。各学年から１名の教員が同行する。

なお、リーダーとなっている生徒たちは、この企画を「岩手県高校生ボランティアプロジェクト」と命名し、自分たちが大学生になったらサポーターとしてこの企画に携わり、盛岡南高校のボランティア活動を継続させて行きたい、と話している。さらに、可能であれば他校にも呼びかけ、内陸の高校生の自主的な活動にしていきたいと考えている。

夏休みにボランティアを終えたときは、進学した先で友人を連れて被災地を訪れたり、大学でボランティア活動を企画したいと考えている生徒が多かったことから、その気持ちを忘れずにぜひ実現させ、多くの人に被災地の現状を伝え、自分たちの活動を継続させてほしいと思っていた。しかし、生徒たちはより熱い思いを持ってこれまでの活動に取り組み、今後のことも考えているのだということが分かった。このような自主的な活動が生まれたことは大きな成果である。この活動を今後も継続していくための手立てを学校としては考えて行きたい。


平成26年12月22日

「第１回岩手県高校生ボランティアプロジェクト in 釜石」企画書

代表者　岩手県立盛岡南高校２年
大貫　岩手県立盛岡南高校３年

１．目的
１　昨年度から続けると盛岡南高校の復興教育において、お世話になった釜石市の方々に感謝しの意を込めて恩返しをしていきたくこと。
２．年齢の離れた未来のを交流することによる、互いに良い刺激を与え合うこと。
３．「第１回岩手県高校生ボランティアプロジェクト in 釜石」（以下本企画）を高校生が中心となって企画的に企画・運営することにより、参加の機会を広げていくことの効率的・経験をし、活動及び大学進学後の生活、活動の糧とすること。
２．日時
２月 21 日(土)・日(日)
３．参加者
・17名（バス定員数）※参加希望者数につき、変更あり
県中高校盛岡南高校生徒有志
担任等引率（後）
４．場所
釜石市 復興支援拠点
仮設住宅
５．費用
３０，０００円
６．内容

現在用意されている	仮設住宅
・部屋づくり ・理科実験（このサンドル参加） 【ムアトレイン（ペットボトルの浄化装置） ・自然エネルギー（太陽光発電/手作りヘリウムボトル） ・静電気実験】 ・折り づくり ・外遊び（場合によって対応） ・野球盤/シャボンレス/なわとび/サッカー/おにごっこ/しゃぼん玉遊びゲーム ・中遊び（場合によって対応） ・読み聞かせ/ストックアウト/ジェンガ/ ・音楽ゲーム（指揮ゲーム）/ギター体験/ ・絵を描き	・フォトフレーム作成（飾える） ・手袋　クラフト作成（飾れる） ・体操 ・部屋づくり ・ボジョゲーム ・安眠室の新聞を作成し、下記のゲームをやることに参加者を募集し、最後にその新聞会の感想ごとに表彰を設ける。 ・トランプ ・ドミノ　　場合によって対応 ・ウェンガ ・ウノ

※時間の大小、人数に合わせて適宜変更有り

このような内容で進めていきたいと考えています。よろしくお願いします。
準備は今まで同様、沙藤によろしくお願いします。

【企画書（案）】

Ⅳ　研究のまとめ

１　研究の成果

同じ被災県に生きる者として、沿岸部が被災しまだ苦しんでいる人たちがいることを忘れてはならない、そして自分たちでできる何かをしていかなければならないと考え、復興教育に取り組んできた。生徒たちは私たちが想像以上に多くのことを感じ、考え、成長してくれた。２年次の最初のボランティアから帰ってきて、明らかな生徒の変化を感じた。その変化は、考え方であったり感じ方であったり将来の夢であったり生徒によって異なったが、復興教育を学年全体で行ったことの確かな手応えを感じた。

２年間の活動のポイントは次のとおりである。
①事前ガイダンスで復興教育の意義を伝えた。
②復興教育講演会やコラムノートなどで震災の実態と復興の現状を学び続けた。
③全員が被災地に行き現状を知った。
④ボランティア活動を２年間継続した（学年企画としては有志の活動も含め６回）。
⑤復興と防災の両面から活動することができた。

当初は教務課の総合的な学習担当として学年の総合的な学習の時間の企画としてボランティア活動に携わってきたが、活動が広がり、防災教育にまで発展したことは大きな成果であった。防災活動もボランティア活動とも生徒の自主的な活動が現れたことは特筆すべき点であろう。

前述したとおり３年生の生徒は復興ボランティア以外のボランティア募集にも積極的に参加するようになった。自分たちの「何かをしたい」「人の役に立ちたい」という気持ちが、逆に多くの方に感謝されることに驚くとともに大きな喜びとなり、多くの人に自分たちの活動を伝えたい、この活動を継続させて行きたいと思っている。そして、前述の通り、自分の将来と関連させて復興や防災を考えることができるようになった。昨年度の３月 11 日に自主的に宮古市田老を訪れ防潮堤の上で被災地の方と黙祷をしてきた生徒は、３年次の夏休みにアメリカでの留学を体験し、そこで被災地の現状や自分たちの活動を伝えてきた。更にその縁で 11 月 13 日にキャロライン・ケネディ駐日米国大使公邸で行われたレセプションに招待され、大使の前でもスピーチを行い、自分の思いを伝え、被災地の現状や取組を伝える場が少ないことを大使や多くの来客に訴えてきた。

このように、自分たちは 3.11 を語り継ぐ、そして復興に携わって行く、どこにいても自分の命を守れる人間になるという気持ちを忘れずにこれからも生活してほしいと願っている。

2　今後の課題

(1)　学校の中での継続（学校としての「つづける」）

同じ被災県でも内陸では風化が進んでいる。この活動をする前も今もそれは感じている。だからこそ内陸の高校が沿岸に行きボランティア活動をする意義は大きいと考えている。

しかし、残念ながら学年間、教員間でも復興教育に対する温度差がある。今年度は全学年でボランティア活動に出かけたり被災地見学を行ったが「学校行事」という意識でいる限り成果はあまり期待できないのではないか。教員が積極的に復興教育に携わろうとする気持ちの涵養が大きな課題としてあげられる。「アクサ　ユネスコ減災教育プログラム」教員研修の中で「減災（防災）教育はボトムアップとトップダウン」という話を聞いた。熱心な教員の働きかけと管理職からの指示がなければ、減災（防災）教育は進まないし成功しないということだ。復興教育も同様であろう。本校は２学年長だった三田先生をはじめとする学年団の先生方の熱い思いと、管理職の理解があり２年間活動を継続・発展させることができた。次年度以降これを継続させることができるかは、生徒たちの続けたいという思いに答える教員がいるかにかかっている。これがクリアできれば、まだ意識の涵養ができていない１、２年生の生徒たちの気持ちも変わってくるだろう。

ボランティア活動を実施するのは NPO 法人など外部とのやりとりが欠かせない。それを厭わずに行えば実施は難しくない。早い時点で学校行事に組み込み、外部との交渉を始めることが鍵である。クラスごとに違う実施日であった昨年度は時間割も問題の一つだったが、私が時間割係でもあったので、その点は解決しやすかった。

昨年度は学年としての取組であったが、今年度は学校全体で復興教育に取組ことになり、私が主担当となり各学年から１～２名の担当者が決められたが、組織としての活動とはならなかった。この点は大きな反省点である。しかし、復興・防災の取組は学年だけでなく総務課、保健厚生課などの分掌も関わってくることであり、学校全体の取組として継続させていくのであれば体制の見直しが必要である。予算が決定するのが年度途中のため計画を立てにくい点は否めないが、総合的な学習の時間やLHRの年間計画に位置付け、復興・防災教育の年間計画を立てる必要がある。

(2) 防災教育の継続（防災教育の「つづける」）

防災教育に関しては、避難訓練は上手くいくことが目標ではない、ということを踏まえて訓練をする必要がある。訓練をすることで課題が明らかになり、それを次の訓練までに改善していく。本番は訓練したことしかできないのである。より実際の災害を想定した訓練を繰り返し行いたい。また、今年度は実施できなかったが、実際に避難所になることも想定して、避難所開設訓練を行う必要がある。県立高校は避難所には指定されていないが、高校生は避難所運営の大きな力となるため、地域の避難所で活躍する可能性が大きい。地域の協力を得て実施していきたい。また、地域の小・中学校との連携や、広域の通学区域である高校での帰宅時の避難訓練、引渡訓練などやらなければならないことはたくさんある。実施時間の確保も課題となるだろうが、生徒の安全を第一に考えるならば、ショート避難訓練等工夫しながら実施していかなければならないだろう。

実施に当たっては生徒、教員ともリーダーが必要である。リーダーの思いが伝わると、他の生徒たちも変わる。2015年1月15日に実施した第2回ショート避難訓練のアンケートの自由記述欄を見ると、3年生はこうした方が良かったのではないかという提案を記入する生徒が多かった。1年生では「緊急放送が鳴ると頭を守るというサイクルができた」、「3組は全員頭を保護していた」などという記述が見られた。来年度はこの生徒たちが避難訓練の重要性を後輩に伝えてくれると期待したい。

「訓練のための訓練」は楽である。しかし、それは決していざというときに役に立たない。子供たちの命をそして自分の命を守るのであれば、避難訓練は改善していかなければならない。

(3) 外部へのPR（「つたえる」、「つなげる」）

3.11を風化させないためにも、生徒たちの体験を家族や友人を通じて伝えていくようにしたい。そして、この活動をマスコミ等を利用して世間に知らせることも「つたえる」ことになるだろう。これは決して学校PRではなく、子供たちの真摯な思いを「つたえる」ということだ。そうすることで、まだ被災地でボランティアの需要があること、高校生でもできる活動があることが伝わり、活動がつながっていくだろう。実際、昨年度の活動が報道されたのち、お世話になったあるNPO法人に、同じような活動がしたいという問い合わせがある学校からあったそうだ。ただ、問い合わせた方は「予算が付いたのでボランティアをやらなければならない」「一回でもやらせればいい」というスタンスだったため、学校はなぜボランティアをするのか、という問い合わせがそのNPO法人から寄せられた。この経験から、活動だけでなく、「思い」も伝えていかなければならないことを痛感した。その点、2014年3月11日にFM岩手盛岡支局が報道した特別番組に生徒が出演させていただき、自分たちの思いを直接伝えることができたのはとてもありがたいことであった。

（謝辞）

本当に多くの方々に支えられお世話になって実現できた活動である。多くの社会福祉協議会やNPO法人の皆様、そして何度もボランティアや出前講座のマッチングを行っていただいたSAVE IWATEの皆様に厚くお礼申し上げたい。ボランティア先では市町村役場や県の職員の方も同行いただき、現地の被災や復興の状況の説明をいただき過分な謝辞をいただいた。さらに、ボランティアに行ったにも関わらず、依頼主の方や、たまたま通りかかった方などから多くの差し入れをいただいたり暖かい言葉をかけていただき、生徒達は「ボランティアは人の心を動かす」「自分たちがやっていることが認められている」という思いを持つことができた。また、多くのメディアに取り上げていただき、多くの方に本校の活動を知っていただき、それが生徒の励みになると同時に、私たちは被災地のことを決して忘れないのだと思いを伝えることができたと考えている。

「中学生・高校生による全国防災会議」で兵庫県立舞子高校環境防災科の先生から「ボランティアは教育的効果を狙って行っているのではない。ニーズがあるから行っているのだ。」というお話をお聞きした。この２年間の活動を通じてこの言葉を実感している。学校では何かしらの効果を期待して活動を行う。しかし、ボランティアはする側の押しつけでは、相手の迷惑になるだけである。ニーズがあるところに行き、高校生ができる活動をする。その中で何かを感じ取り、被災県の一員としてこれからの自分の生き方を考えていけるようになればいいのではないか。実際、活動を始める前、私たちは「東日本大震災を忘れてはならない」「何かをしなければならない」という思いだった。きっかけを作るのは教員である。「何かを感じてもらいたい」という教員側の熱い思いの元で企画をすれば、生徒達は変わるということを実感した。

この活動を通じて私自身多くのことを学ぶことができた。お世話になった多くの方々へ御礼申し上げ、結びとしたい。

お世話になった団体の一覧（順不同、敬称略）

一般社団法人　SAVE IWATE
岩手日報社
いわて未来づくり機構（(公財）助けあいジャパン）
社会福祉法人　釜石社会福祉協議会　生活ご安心センター
NPO法人　陸前高田市復興サポートステーションP@CT
NPO法人　再生の里ヤルキタウン
NPO法人　ブルーサポートいわて
NPO法人　UnitedGreen
グリーンハート山田
社会福祉法人　岩手県社会福祉協議会
鵜住居地区復興まちづくり協議会
日本赤十字社岩手県支部
日本ユネスコ協会
栗林児童館（釜石市）
社会福祉法人　清風会　あいぜんの里（釜石市）
FM岩手盛岡支局
JICA
NPO法人　立ち上がるぞ！宮古市田老
陸前高田観光ガイド部会
椿の里・大船渡ガイドの会
釜石観光ボランティアガイドの会
新生やまだ商店街協同組合
岩手県総務部総合防災室
岩手県立高田高等学校
岩手県立宮古水産高等学校